今、死者は甦った……人は獲物となり餌となる。
DAY OF THE DEAD
死霊のえじき
カラー作品・アメリカ映画・ゾンビングサウンド
監督・脚本●ジョージ・A・ロメロ◆特殊メイクアップ効果(SME)●トム・サビーニ
●製作総指揮/サラー・M・ハッサネイン●製作/リチャード・P・ルービンスタイン●撮影/マイケル・ゴーニック●特殊効果/スティーブ・カースホフ
●ゾンビ・マスク制作/デビッド・スミス、テリー・プリンスほか●音楽/ジョン・ハリソン●〈サントラ盤〉ポリドール・レコード
◆㈱東北新社＝東映クラシックフイルム㈱共同配給

郵 便 は が き

特別試写会御案内

死霊のえじき DAY OF THE DEAD

"キング"ジョージ・A・ロメロの衝撃の最新超恐怖ホラー・スペクタクル!!
'86年度アボリアッツ国際ファンタスティック映画祭特別招待作品。

■日 時　3月14日(金)　午後6時00分 開場　午後6時30分 開映

■会 場　ヤクルトホール　☎(574)7255
(港区東新橋1-1-19 ヤクルト本社ビル)

●本状1枚1名様有効。●開映後の入場は固くお断りします。
●満員の際はお断りする事がありますので御了承下さい。

東映クラシックフイルム(株)宣伝部
〒104 中央区銀座3－2－17 TEL(564)4944

映画小説
DAY OF THE DEAD
死霊のえじき
ローレル・プロダクション映画
著　ジョージ・A・ロメロ
文　岡山　徹
X
講談社文庫

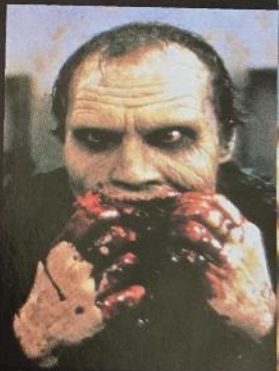
2×××年10月——。地球上の都市という都市、街という街は、おぞましい〝死霊〟に制圧されていた。生き残った人間にゾンビの容赦ない襲撃が続く!!

息もつかせぬ残酷シーンの連続。超スプラッター・ムービーの完全ストーリー・ブック!!

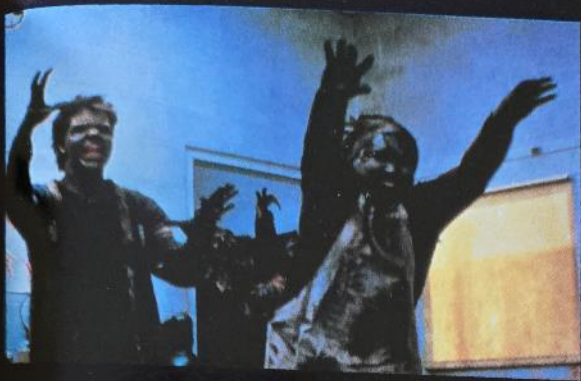
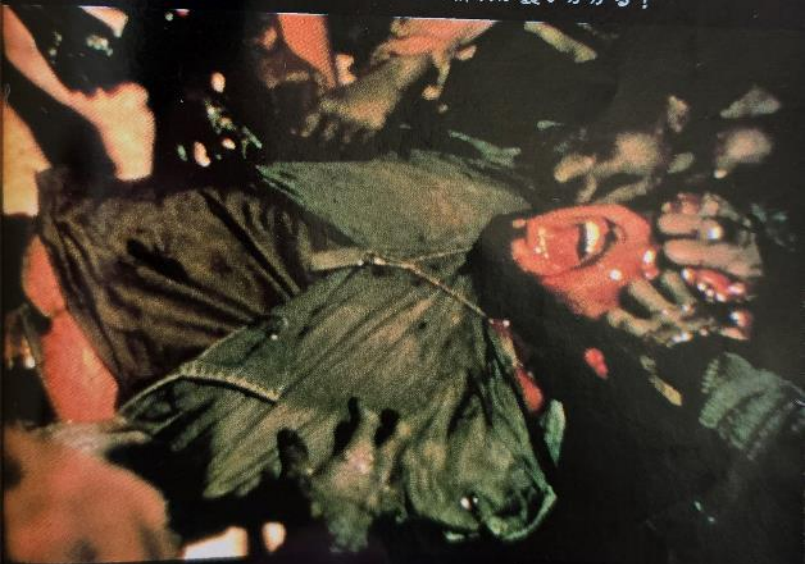
死霊のえじき

▲倉庫内では争いが絶えない。極限状況の中、人間同士の緊張も高まる。

▼博士の飼っていたバブが反応を示しはじめた。

▲ローガン博士は，ゾンビを飼いならす研究に夢中になっていた。

▲開かれた扉から，ゾンビたちがなだれこむ!!

◀死を覚悟したミゲルにゾンビの手が伸びる。

▼唯一の安全地帯だった地下へもゾンビが…。

▼逃げまどう人間たちに容赦なくゾンビの群れが襲いかかる！

講談社X文庫

映画小説

死霊のえじき

ローレル・プロダクション映画作品

著　ジョージ・A・ロメロ
文　岡山　徹

講談社

目次

人物紹介

サラ
（ロリー・カーディル）

気丈で理知的な女科学者。地下倉庫基地にのこる最後の女性。ゾンビ撃退の研究のかたわら、男たちに混じって、生存者の探索に出かけたり、研究用ゾンビの捕獲を手伝ったりと行動力、意志力はバツグン。極限状況のなかでもけっして自分を見失わない。力で科学者たちを押さえつけようとする軍部にことごとくさからい対立を深めていく。

ジョン
（テリー・アレキサンダー）

ジャマイカ生まれのパイロット。相棒とふたりで、居住区からだいぶ離れたキャビンに住んでいる。自分の仕事は確実にこなすが、その他のことには非協力的。サラの説得にも耳を貸そうとしない。機械的で冷酷な話し方をするが、その思考は哲学的で宗教的。正義感も強く、最後にはサラの強力な味方となる。

DAY OF THE DEAD

ローガン博士
（リチャード・リバティー）

フランケンシュタインとあだ名される科学者。口達者だが、愛嬌のある老人。ゾンビを飼い慣らす研究に没頭している。反応のいい研究用ゾンビにバブという名をつけ、わが子のようにかわいがる。しかし、ゾンビに襲われて死んだ兵士の肉を、バブに与えたことが軍部に知れ、ローズ大尉の怒りを買ってしまう。

ローズ大尉
（ジョセフ・ピレートー）

軍部の最高責任者。科学者たちの研究に期待して協力してきたが、なかなか成果が上がらないことに激しくいらだつ。自分の配下にならないサラをにくみ、対立を深めていく。力で全員を押さえつけ、自分の命令に服従させようとするファシスト。最悪の事態には、自分の部下も平気で見捨てる冷血漢である。

DAY OF THE DEAD

ミゲル
（アントン・ディレオ・ジュニア）

サラの恋人で、重大事件のひきがねとなる人物。神経が細く、異常な状況にたえかねて不眠症に悩まされている。たくましいサラに反発を感じ、彼女の思いやりも、すなおに受けることができない。

マックダーモット
（ジャラス・コンロイ）

ジョンの相棒。基地内唯一の無線技師。兵士どうしの争いにまきこまれそうになったサラを助け、自分たちのキャビンに招待する。すこし臆病な面もあるが、いざというときには頼りになる人物。

バブ
（ハワード・シャーマン）

ローガン博士が研究用に飼っているゾンビ。人間であったころの記憶がだいぶのこっていて、博士の調教にもいい反応を示す。自分をかわいがってくれる博士に対しては、けっしてきばをむかない。

映画小説

死霊のえじき

岡山　徹

1 プロローグ

夜が来て、夜明けが訪れ、そして昼がやってきた。
あの夜、俺はとうに死に果てたはずだった。
俺が生きているのか、それとも死んでいるのかなんて話をここでくどくどぶちあげたところで、どうせそれは俺以外の人間から見ればどうでもいいことなのだ。あたりまえのことだが、自分の身が痛むわけではないのだから——。
あれはいつのことだったろうか？ その記憶さえも、いや記憶ということそのものがもうだいぶ薄れかけている。だから曇った眼鏡で物を見るようなおぼろげな記憶で、あの事件を語ることから始めよう。
あの夜、俺はあれを見た。
『マクベス』ではないが、森が動き出したのだ。いや、そうではない。まるで動く植物人間のごとく、無器用に足を踏みだし、うごめいていたのは〝生ける屍（リビング・デッド）〟、ゾンビだったの

だ。

動物が支配しているかに見えるこの世界は、やがて植物が支配し、やがて鉱物の世界と化すだろう。

動物が死滅し、植物に支配されるだろうそのとき、人間にとっての法のごとく彼らが押し広げるのは〝量の論理〟、いや、〝数の論理〟だ。一年、十年、百年という動物にとってみれば長い月日を彼らは一日のごとくにみなし、じわじわと地表を支配していく。

動物にとってはくだらない芽ぶきや開花は、気づかないうちに支配への一歩一歩となっているのだ。

動物が植物を歯牙にもかけなかったように、この俺も動く植物人間、あのリビング・デッドたちを一体一体倒していけば、取るに足らないものとタカをくくっていた。

しかし、植物がやがて地表を我が物とするように、屍(しかばね)どもが押し広げたのも〝数の論理〟だった。

あの夜、俺は一体を発見した。

奴(やつ)は、国道沿いを例のごとく無器用に歩いていた。

俺の〝生の臭い〟を嗅(か)ぎつけて、奴はこちらに向かってきた。

はじめはまともな人間が煙草の火でも借りにきたぐらいに思っていた。ところが、そい

つの形相を見たとき、事情は一変した。目はただれ落ち、鼻はもげ、顔面の左半分は崩れ落ちて、脳みそがはみだしていたのだ。
それはとても生きている代物ではなかった。
しかも、俺に襲いかかってきたのだ。
俺はとっさにそばにあった大きめの石を拾い、恐怖のあまりそいつの脳天めがけて投げつけた。石は見事に脳天を打ち砕き、そいつはあっけなく絶命した。
これは後でわかったことだが、奴らを倒すにはこの方法しかなかった。奴らの脳みそを打ち砕くこと。体をいくら攻撃したところで効きめは全然ないのだ。もちろん、動きを封じるためなら、手足をもぎとることも有効かもしれないが——。
俺はそいつを倒したことでホッとし、すこし離れた森の方を見やった。ところが、それは森ではなかった。そいつの仲間の、リビング・デッドたちが大挙して動いていたその影だったのだ。
一対一となれば、奴らの動きはのろいので、的を射た攻撃によって粉砕することはそれほど難しくはない。しかし、植物が世界を支配するように、数で攻めてきたときの奴らは食虫植物(インセクティボラ)どころか、まさに食人植物(カンニバリボラ)と化すのだ。
一体と戦っているうちに、一体がのそのそと近づいてくる。そののろさをばかにしてい

るうちに、のろさにやられてしまうのだ。まるで動物が植物の成長のばかげたのろさを鼻で笑うときのように――。
　俺は動く森に恐れをなして、国道を駆けだした。ところが、行く手には動く食人鬼たちが何十体も待ち受けていた。俺は持ちまえの腕っぷしの強さでそれを乗りきってきたが、とあるガソリンスタンドにたどり着いたときには、よくぞここまで生き伸びてきたものだと自分に感心したものだ。
　それは俺の体が黒いためだろうか、とも思った。夜の闇に紛れるには黒い肌が有効ではあった。
（くそっ！　こんなときに自分が黒人であることをありがたく思うなんて……人生なんて皮肉にできてやがる！）
　しかし、それは俺のひがみっぽい思いすごしだった。その晩の俺は、ごていねいにも白っぽいカーディガンを着ていたのだ。目立たないどころか、目立ちすぎたぐらいだ。
（黒に白なんて、まるでチェッカー・フラッグじゃないか、くそ！）
　俺はしゃれにもならないそんな考えに、思わず舌打ちした。
　だが、いいこともあった。そのガソリンスタンドにはガソリンが満タンになったトラックが打ちすてられていたのだ。しかも、キーまで入っている。店員らしい人影も、誰の人

影も見えなかった。
　俺は思わず小躍りして、急いで車に乗った。
（そうだ！　まず民家を探すことだ！　家に逃げこめば、電話がある。さっきのスタンドの電話はどれも不通だったし、まず警察に連絡することだ。それにしても、いったいこの騒ぎはどうなってるんだ？
　まともな人間はいったいどこに行っちまいやがった？　俺はただ散歩の途中に、原っぱに寝そべって一眠りしただけなのに、目を覚ましてみると、このザマだ！）
　そうこうしているうちに、車はとあるうら寂しい民家に着き、俺はトラックの荷台にあったレンチを持って、その家に近づいていった。ところが、中にいたのはその家の人間ではない、若くてきれいな白人娘だった。しかも、その女はかなりの放心状態で、やはりゾンビに追われてると、うわごとのようにいい、とりあえず俺たちは二人きりでその家に立てこもったのだ。
　その家の主は殺され、無惨な死体が二階の廊下に打ちすてられていた。俺はその女と力を合わせ、家の中からバリケードを築いた。材木がわりになるものならなんでもいい。部屋ごとのドアをひっぺがし、外に面したドアに五寸釘で打ちつけたのだ。
　しかし、その女はまったく役に立たなかった。墓場でやはり同じように奴らに弟を襲わ

れたその女は、かなりの放心状態だったのだ。狂気の一歩手前だったのだ。

そして驚いたことに、その家に立てこもっていたのは俺とその女だけではなかった。夫婦ものが一組とその娘が二人、そしてその長女らしい娘の恋人の計五人が、すでにこの家の地下室に立てこもっていたのである。彼らは俺がつけたラジオの音を聞きつけて、地下室から出てきた。食糧に飢えていたのではなく、情報に飢えていたのだ。

男手が不足していた俺にとって、これ以上心強いことはなかった。なにしろ、五体満足な大の男が二人もいたからだ。

ところが、彼らは地下室にこそ立てこもるべきだといいはった。何十人というリビング・デッドどもが大挙してきたら、いくらドアを補強しようがひとたまりもないといいはったのだ。なかでも一家の主人らしい頭の禿(は)げた中年男は、一つ屋根の下に黒人といるのは一秒たりとも我慢できないという風情(ふぜい)で、一階で踏みとどまるべきだという俺の主張を一蹴した。

地下室に逃げこめば、一つしかない出入口を守ることは守りやすい。しかし、それが破られれば逃げる場所はもうないのだ。一階を死守すれば、それが破られたときにも、まだ二階があり、おまけに運がよければ地下室に逃げこむことだってできる。

俺のこの論理的な考えに歩み寄ったのは、長女の恋人の若者一人だけだった。例の陰険

な黒人嫌いの主人は、論理ではなく情緒で動く人間だった。頭が薄いうえに中身も薄かったのだ。

けっきょく、夫婦と、けがをしている下の娘は地下室に立てこもり、長女とその恋人、そして俺と例の白人女の四人は一階で奴らからの攻撃に備えることになった。

やがて、奴らの攻撃が始まった。

並みいるリビング・デッドどもが、ドアといい、窓といい、あらゆるすきまから生きた人間の臭いを嗅ぎつけ、ウーウーと不気味なうめき声をあげつつ押し寄せてきた。

俺はある妙案を思いついた。さっき奥からひっぱりだしてきて、つけたテレビの情報から思いついたのだが、ゾンビどもは、火を怖がるという。それならば、手製の火炎ビンを作り、二階の窓からそれを投げ、奴らがひるんでいるすきにトラックに乗りこんで逃げを打つのだ。

この作戦は見事に成功したかに見えた。長女とその恋人が運転席に乗りこみ、俺が荷台に乗って連中を威嚇しながら、我々は近くのガソリンスタンドへ行き、ガソリンを補給した。

ところが、あわてた例の若者が給油ホースでガソリンをばらまき、近くに置いておいた松明でガソリンが引火してしまったのだ。トラックは火に包まれ、俺がスタンドに飛び火

するのを消し止めているすきに、二人はトラックで逃げようとした。だが、トラックは炎上爆発。二人とも逃げ遅れてしまった。後はいうまでもなかった。臭いを嗅ぎつけたゾンビどもが、奪い合うようにして、二人の臓物を食らいはじめたのだ。

俺はあわてて家にもどったが、その後のことはあまりよく覚えていない。ただ、地下室に隠れていた下の娘が父親も母親も殺し、食ってしまったことだけは確かだ。その娘のけがはただのけがではなく、ゾンビに食いちぎられたときのもので、彼女もゾンビと化していたのだった。

それとも、父親は俺と争っているうちに、俺が殺したのだろうか？　ああ、頭が痛い。思い出そうとすると、頭が痛む。

そして、もう一人の白人娘もゾンビの餌食となっていた。俺がどうやって地下室へたどり着いたかは、いまだによくわからない。地下室には頭を吹き飛ばされた父親の死体と、胸を何べんもスコップ様のもので突き刺された母親の死体が転がっていた。

俺は家にあったライフルをしっかり握りしめ、地下室のドアを厳重に締め、地下室に一人で立てこもった。ついに、生きのこったのは俺一人となってしまった。

一階はリビング・デッドどもに完全に占拠され、地下室のドアをこじ開けようと連中はドアに群がっている。けっきょくは例の禿げ頭の親父のいうとおりになってしまった。地

下室に閉じこもるしかなくなっていたのだ。
　俺はうとうとと眠りこけた。いつ、死んだ夫婦の死体が蘇生するかびくびくしながら、いつドアがこじ開けられるかびくびくしながら――。
　どれくらいの時間眠りこんだのだろうか？　いつのまにか一階で物音がしなくなり、遠くの方で犬の吠える声が聞こえてきた。ひょっとして、自警団の人間ではないか？　俺は恐る恐るドアに近づき、そっと開けてみた。
　ゾンビどもはすっかり姿を消し、窓のすきまからライフルを持った自警団が遠まきに近づいてくるのが見えた。彼らは力を合わせ、ゾンビどもの頭を狙い、こうして銃で葬って歩いていたのだ。
　俺はライフルを持ちながら、うれしくなって窓に近づいた。
（助かった。俺は助かったんだ！）
　そのときだ、頭に強い衝撃を感じたかと思うと、木々の緑も家のきれいな壁紙の色も、白黒と化し、つぎの瞬間、血しぶきの当たった天井が視界に入り、後はなにもわからなくなった。
　俺は皮肉にも自警団に殺されたのだ。ゾンビと見まちがわれ、俺は脳天に致命的な一発を食らったのだ。

（くそっ！　なんてこった！　白人どもめ！）
すべてが無と化し、こうして夜は終わりを告げたのだった……。

そして夜明けがやってきた。
俺は気がつくと、フィラデルフィアの郊外にある巨大なショッピング・センターをうろついていた。生きた人間としてではなく、生ける屍（リビング・デッド）として――。
頭をやられれば、永遠の死が訪れるはずだった。しかし、俺の脳は辺縁系がやられただけで、中枢はのこっていたのだ。
しかも、地獄に俺の入る余地はなかった。
〝地獄が満員になると、死者は地上を歩きだす〟
あのブードゥーの教えは真理だったのだ。
一つの死の後に、もう一つの死がやってきて、また死が訪れる。いったい、いくつの死を乗り越えれば真の死がやってくるのだ。生きているときは人間は死を恐れていた。しかし、死んだ人間は真の死が訪れないことに恐怖するのだ。
しかも、地上の人間どもが〝What the hell〟や〝The hell, No!〟などと地獄（ヘル）や悪魔（デビル）という穏やかならぬ言葉を発するたびに、金縛りの人間がまわりの音だけははっきりと聞こ

えるように、なにか地上に呼びもどされるような気分になるのだ。

　モールと呼ばれる野中の一軒屋のそのショッピング・センターに俺が引きつけられたのは、四人の生きた人間の臭いのせいもあったが、それは長年の習慣のせいでもあった。一週間に一度食糧を買い出しにいくように、俺はまさに人肉を買い出しにいったのだ。

　集まってきたのは俺ばかりではなかった。死体に群がるハゲタカのように、何百という同じようなリビング・デッドどもがモールのあちこちに蝟集し、闊歩していた。

　モールには四人の人間が立てこもっていた。男が三人、女が一人。たしか昔は男とか女とかそんな区別をしていたような気がする。

　ともかくその四人がこの巨大なショッピング・センターに立てこもっていた。

　彼らがここに目をつけたのは、食糧などというクソおもしろくもない生活必需品はもちろんのこと、十分な武器弾薬や現金も山ほどあったからだ。

　しかし金など必要なかった。なぜなら、金を払わなくても、好きなだけモールの中の物を略奪することができたからだ。

　なにがおもしろいのか、物を奪って喜んでいる愚かな連中の様子はガラス越しによく見えたが、近づくことはできなかった。彼らは、モールのありとあらゆるドアをロックし、我々をしめだしていたからだ。しかし、それも時間の問題だ。時間の問題なのだ。いつ

か、すきを見せたときに数で俺たちは勝利するのだから——。
日が経つにつれ、まるで砂糖に群がる蟻のようにゾンビの仲間たちがモールの周りに集まってきた。あまりに増えつづける我々の数に恐れをなして、中の二人の男が外に出て、巨大なトラックで入り口をふさぎ、バリケードを築こうとした。
ところが、モールの入り口に向かう途中、そのうちの一人が我々の仲間の一人に腕を食いちぎられてしまったのだ。伝染性の死がこのときから彼を襲いはじめた。
二人は取り囲むリビング・デッドたちを必死でかいくぐり、なんとかモールの中に逃げこんだ。一人一人ゾンビの頭を銃で吹っ飛ばしながら——。
が、ショッピング・センターという巨大な密室の中にこうして生きた死が封じこめられたのである。
もう時間の問題だ、時間の問題なのだ。
やがて、我々の待ち望んでいた瞬間がやってきた。バイクに乗った男たちの集団が、やはりこのモールの略奪にやってきて、ドアという ドアを打ち壊し、乱入しはじめた。
彼らは人間の中のゾンビだった。現金、食糧、武器、酒を略奪しにやってきたのだ。彼らは平気で我々の仲間を殺した。彼らはバイクで店内を走りまわり、さまようゾンビの首をはね、剣で目を突き、頭を銃で吹っ飛ばし、残酷の限りをつくした。人間でも平気で殺

す奴らだ。

こうして我々はついに中に入ることができた。これで数で勝利することができるのだ。しばらくすると、先にここにやってきていた奴らとバイクの奴らが銃撃戦を始めた。我々にとってはどちらが勝とうがどうでもいいことだ。そのうちに、我々の数はバイクの連中を圧倒し、一階にいる彼らを食いつくしてしまった。

先にここを占拠していた連中が、まだ上の小部屋に生きのこっている。

そのうちの一人がエレベーターで新しい仲間に殺された。殺したのは例の腕を食いちぎられた男で、ゾンビと化したその男はついに仲間を食いはじめたのだ。

我々はエレベーターを使い、ダクトを伝わり、上の小部屋にじりじりと近づいていた。のこったのはまたも黒人の男と白人の女だった。ところが、二人は友をのこし、あるいはひょっとすると恋人をのこし、ここにやってきたときに乗っていたヘリコプターに乗って、飛び立ってしまった。

二人がヘリに向かうとき、もうすこしというところまで近づいていた俺に向けて、やけっぱちになった男が自動小銃を撃ちまくった。その自動小銃の弾丸が俺の頭を今度は頭蓋骨ごと吹き飛ばした。

これで俺も永遠の死へと向かうことができる。これでいいのだ、これで――。ただ燃料

のすこししかのこされていない二人を乗せたヘリが、無事逃げおおせたかどうか、俺には知る由もなかった。

モールの一室では、見てくれる主人を失ったテレビが、映す映像も失い、ザーッという耳ざわりな雑音とともに砂のような映像を送っていた。

その砂の映像にときおり混じる得体の知れぬ不整脈のごとき雑音。

それは太古の宇宙が誕生したときの大爆発（ビッグ・バン）の爆発音の名残（なごり）だという。

その大爆音が宇宙をさまよい、テレビがそれをいまだに拾っているのだ。

死者が蘇り、夢遊病者のごとくさまよい、そして人肉を食うという阿鼻叫喚地獄のそも原因は、金星に向かう人工衛星が未知の放射能を浴び、それが地球に舞いもどって放射線を発し、つぎつぎと死者を蘇らせたせいだとも、地球に接近した謎の彗星が大爆発によって特殊な宇宙線を発し、それが死者を蘇らせたせいだとも、いろいろいわれてきた。

しかし、そんな科学者の科学かぶれした考え方はどれも表層のものだった。テレビが拾う、宇宙にさまよう大爆発の爆発音は、じつは宇宙の誕生したときの産声（うぶごえ）ではなく、宇宙の凝縮した死霊が大炸裂を起こし、全宇宙に散らばったときの大爆音（ビッグ・スクリーム）なのであった。

地球に現存するすべての元素が宇宙からふり注がれたのと同じように、地球にさまよう

すべての死霊もまた宇宙からふり注がれたものなのだ。そして、彗星の爆発などによって発せられる宇宙線とともに、地上にふり注がれたのである。

モールの向こうに広がる地平線がすっかり明るくなり、陽の光がふり注ぎはじめた。鳥たちが木々から飛び立ち、もうすっかり小さくなったへりの姿と紛れてしまった。

こうして、夜明けは終わりを告げ、新たなる一日（ザ・デイ）が始まったのだ——。

2　死の行進

サラは白い壁をいつまでも見つめていた。
ブロックを積み上げて作ったその壁の一つ一つのブロックが、カレンダーのますめの一つ一つの空白に見えてくる。
それは彼女の空白の日々を象徴してもいた。死の世界と化した地上での戦い。それに費やしている彼女の空白な日々。人生の意味なんかない、ただ生き伸びることにこそ意味はあるのだった。人生に意味のある時代は、もうとうの昔に過ぎ去っていたのだ。
その白い壁には十月のカレンダーがかけられていた。最後にたった一つ空白をのこし、すべて×印がつけられていた。この最後の日に自分が生きのこれるかどうか、それすら定かではない。
彼女は過ぎ去った日々、いや生きのこってきた日々をいつくしむように、カレンダーのかかった白い壁に近づいていった。

壁の近くに行ったとき、その白い沈黙を破って、生ける屍どもの墓場の土にまみれた黒い手が、カレンダーのますめのようなブロックの一つ一つから突然、飛び出した。そして、生けるサラの肉を求めるように、いとわしくいやらしくうごめいた。

彼女は思わず後ろへ飛びすさった。

そこでサラは我に返った。

ヘリコプターのタービン・エンジンの爆音に負けぬようにはりあげた無線技師のマックダーモットの声で、コックピットの中の彼女は我にかえった。

「なんの応答もないよ。」

「もう一度やってみて。」

彼女はそういって、眼下に広がるフロリダ

半島の景色を見下ろした。もうかれこれ小一時間、こうしてヘリコプターから彼女たちは地上に通信を送っていた。

さながら洪水から逃れたノアの方舟(はこぶね)のごとく、彼女たちのヘリコプターは上空に舞っていた。ただし、地上に広がっているのは洪水ではなく、世界の終末を知らせる〝死の行進〟だった。人間の40万倍にも繁殖したリビング・デッドたちが地上に蔓延(まんえん)し、いまも死の行進を続けていたのだ。

そして、まだ死に侵されていない人間が生存しているかもしれないというかすかな望みをかけ、彼女たちは地上と交信を続けていた。

マックダーモットはうんざりしたようにサラにいった。

「サラソタからエバーグレードまで、まるで反応なしだ。誰もいないよ、すくなくとも無線の前にはね。」

サラは黙っていた。さっきからうつむいたままひとりで考えこんでいるミゲルのことを考えていたのだ。彼は精神的にも肉体的にも疲労の極にあった。いつこの生き地獄から脱けだせるのかという極度の不安から不眠症に悩まされていた。もう一週間以上もろくすっぽ寝ていないのだ。それを知っているのはサラだけだった。

彼女はマックダーモットにいった。

「降りましょ。ハンドマイクを使うのよ。」
「降りるなんて契約にないよ。」
小心なマックダーモットは、そういって地上に降りるのをひどくいやがった。
「このあたりでいちばん大きな町なのよ。あらゆるチャンスに賭けてみなくちゃ。」
「冗談じゃないよ。」
強気なサラはジャマイカ出身の操縦士ジョンに矛先（ほこさき）を向けた。
「降りてよ、ジョン。」
しかし、彼も降りたがらなかった。ぶっきら棒ないい方にそれが出ていた。
「いいだろ。だが、俺はヘリから離れんぜ。ちょっとでもなにかあったら、飛び立つからな。もし、乗り遅れたら、そんときは覚悟を決めるこった。」
ヘリコプター〝40-アルファ号〟が上空を旋回しはじめ、やがてかっこうな場所を見つけて着陸すると、ハンドマイクを持って機から降り立ったのはサラとミゲルの二人きりだった。
機にのこった黒人のジョンと無線係のマックダーモットは、危険があればいつでも飛び立てるようにローターを回転させたまま、そこで待機した。
町の目抜き通りは人気（ひとけ）がなく、ゴーストタウンのように荒れ果てていた。タクシーが略

DAY OF THE DEAD

奪された跡をのこしたまま打ちすてられ、そこここに見えるシュロの大きな葉の残骸がまるで行き倒れた死体のように見えた。

　ミゲルは誰かいないか、誰か聞こえないのかとハンドマイクで何度も叫んだ。その虚しい声が、人気がなくなってひときわ反響する目抜き通りに響きわたった。

　とある路地の片隅に一陣の風が舞い起こり、風で舞いあがった新聞紙が、ドスッドスッと足音をたてて近づいてくる男の足にへばりついた。男はミゲルの反響する声に、うおーっと雄叫びをあげた。フロリダの燦々と降り注ぐ陽光に、その巨大な男の禿げ落ちてまばらになった金色の頭髪が輝いた。男の顔は目の下から上顎のあたりまで醜くえぐれていた。

　銀行の前では札束がシュロの葉とともに風に舞っていた。しかし、いまや紙屑同然のそんなものに群がる者は誰もいなかった。

　また、あのドスッドスッという不気味な足音が、今度は銀行の中から聞こえてくる。巨体を揺すりながら中から出てきたのは、二人のリビング・デッドだった。

　レストランの店先では、腐乱して骸骨化した死体にハエが群がり、フライドチキンのカーネル・サンダースよろしく鎮座していた。

　なおもミゲルの声が虚しく響きわたる——。

その声を聞きつけて、町のあちこちから例の無器用な足どりの足音が聞こえてきた。
ヘリにのこったマックダーモットはまだ必死に無線連絡をとりつづけていた。
「我々は安全なところへ乗せていける。誰か聞こえたら応答を。」
操縦士のジョンはなだめるようにいった。
「あきらめろよ。ここも死の町だ。ほかと同じだよ。」
そのとき、ジョンはエンジン音をかき消すほどのなにか叫び声のようなものを耳にし、マックダーモットにいった。
「おい、聞いてみろ。エンジン音の向こう、になにか聞こえるぞ。」
「なんてこった！」
無線用のヘッドホンを取ったマックダーモットは、思わずそうつぶやき、いつも持ち歩いているウィスキーの入った携帯用の容器で気つけに一杯やった。こんな不気味な叫び声を聞いて素面ではいられなかった。
目抜き通りにいたサラとミゲルはそれを見た。何十、いや何百というゾンビどもが目抜き通りに群がり、海豹のように空に向かっていっせいにときの声をあげたのだ。
サラはとっさに、「ちょっとでもなにかあったら、飛び立つからな。」というジョンの言葉を思い出した。それでなくてもすでに二人の足はリビング・デッドたちの波状行進から

DAY OF THE DEAD

逃れるべくかってに走りだしていた。

サラとミゲルは走って、走って、走りまくった。こんなところにとりのこされたら、たまったもんではない。いまや逃げる場所は空しかなかった。

サラとミゲルがシュロ並木を駆けぬけて、すこし拓けた空き地に行くと、だいぶローターの回転数をあげていまにも飛び立ちそうな〝40-アルファ号〟が二人をまだ待っていた。

二人が乗りこむと、ヘリはすぐに死の世界と化した地上から飛びたった。

しかし、いまは空に逃げおおせても、やがてヘリの燃料が切れたときは地上にもどらねばならない。その町から何十マイルも離れたところで、燃料切れ寸前の〝40-アルファ号〟が降り立ったのは軍専用の敷地だった。

真っとうな建物など一つもない、だだっ広いその敷地の周りには高い金網のフェンスが張りめぐらされ、ヘリの風圧がまき散らす生きた人間の臭いで興奮したゾンビの烏合の衆がいまにもフェンスを引き倒さんばかりにその周りに群がっていた。

こんな頼りないフェンスの中で彼らは踏みとどまるというのだろうか？　そんな恐怖心をすこしでも忘れるためか、敷地内では〝フロリダ・ゴールド〟と呼ばれる、フロリダ特

有の陽光をいっぱいに浴びた極上のマリファナが育てられていた。

その収穫を終えた兵士が二人、着陸したヘリの周りにすぐに集まってきた。外のことが知りたくてたまらない兵士の一人がいった。

「よう、なにかあったか？」

操縦席から降りたジョンがいった。

「店閉まいの大安売りで叩き売ってる家が山ほどな。ヘリに給油をたのむ。」

「だめ、暗くなるのを待ってからよ。」

荷物を下ろしながらサラが制した。

「すごい数だわ。」

ジョンは食ってかかった。

「タンクを空でおいとくのか？　緊急発進のときどうする？」

「そのときはそのときよ。彼ら、すごく興奮してるわ。給油は今晩にでも、わたしたちの姿が見えなくなってからね。」

「たとえ見えなくなっても、奴らには俺たちがここにいるのはわかるんだ。タンクを空にしといたら……。」

「彼らを刺激したいの？　ものすごい数なのよ。」

兵士の一人が吐き捨てるようにいった。
「日に日に増えてきやがる。」
「もっと増えたら、外に出てきて撃ち殺すことね。さもなきゃ、中にいること。目ざわりでしょうがないわ。」
サラのタフさには男もたじたじだった。
それにしても、彼女が中にといったのはどういうことだ。ここにはまともな建物なんてありはしない。給油施設と監視所らしき小屋と、そしてぼうぼうと生い茂る雑草があるだけだった。
無線技師のマックダーモットがさっきの兵士にいった。
「ここが郊外で感謝するんだな。町は大繁盛の大にぎわいだぜ。」
ミゲルはまだコックピットの中にすわって、出てこようとしなかった。考えこんでばかりいて、頬もげっそりとこけている。サラがそばへ行って声をかけた。
「ミゲル、さあ、中へ行きましょ。困らせないでよ。」
そういって、サラがミゲルの荷物を持とうとしたとき、ミゲルはついに重い口を開けた。
「余計な世話をやくな。誰の助けもいらんよ。」

彼はそういってコックピットから降りると、つかつか歩きだした。サラもいっしょに歩いた。
「あなたはまいってるのよ。」
「俺か？　俺だけじゃない。みんなまいってるんだ。君以外はな。たしかに君は強いさ。だからなんだ？　俺よりも強い、みんなよりも強い。それがどうしたってんだ。まったく、なんぼのもんじゃい！」
そこに一人とりのこされたサラは、そのとき、新しい墓を見つけた。兵士の話ではクーパー少佐が今朝死んだとのことだった。ヘリで探索に行ってる間に、また一人犠牲者が出ていたのだ。
操縦士のジョンがやってきて、サラはいっしょに歩きだした。彼のほうから話しかけてきた。
「これで十二人になったな。」
「埋葬を嗅ぎつけて、彼らはあんなに集まってきたのよ。」
「明日はどうなる、サラ？　その翌日は、またその翌日は？　奴らは何百に、何千に、何万になる。砂に首を突っこんだって、奴らがケツにかじりつくって寸法だ。こんな生活はくるってるぜ。こんなとこでもたもたしして！」

「ほかに手があれば、よろこんで聞くわ。」
「あるさ、もっといい手が。あのヘリに乗って、どこか島でも見つけて、明るい太陽の下で暮らすんだ。それならどうだ？」
「こんな世界になって、そんな暮らしができて？」
「どんな世界だろうと、やってみたいね。」
逃げだしたくなるのはわかる、しかし戦いを挑み、活路を見いだしてこそ明日はあるんだとサラは信じて疑わなかった。
やがて二人は他のメンバーともども敷地内の真ん中にある鉄の板に立った。しばらくすると、その鉄板はゴオーッという音とともに地面に沈下しはじめた。それは大型トラックが二台すっぽり入ってしまいそうな巨大な昇降機だったのだ。
ここはただの軍用基地ではない。20世紀の後半にはミサイルのサイロとして使われ、21世紀の前半になって、こうして地下貯蔵庫に改造されたのである。この基地は〝セミノル地下倉庫〟と呼ばれ、大企業や国家の重要な資料、新聞のマイクロフィルムやおびただしい数の映画など、あらゆる記録が保存されている地下の大貯蔵基地だった。
しかし、それも21世紀の後半になって、すこしばかり改造が施された。ある科学的な目的のためにである。その目的を実行するために、軍が科学者たちをこのシェルターの中で

守っているのであった。

ただ、ここに立てこもった軍の一部のグループは、遅々として進まない科学者たちの研究に業を煮やしていた。その研究のために軍の犠牲者が続出しているからであった。

あの恐るべきゾンビの群れから逃れる道は空ばかりではなかった。こうして地虫のごとく、地下に潜行する方法もあったのだ。

しかし、空の場合とはちがって、一度地下に逃げこんだらもう逃げる場所はない。もしも彼らが、もし万が一にも彼らがこの堅固な入り口兼用の昇降機に乗って地下に降りてきたら、そのときは、ひたひたと迫りくる死の恐怖にただ立ちすくむほかはないのだ。

現に、地上のフェンスの外ではおびただしい数の生ける屍がその瞬間をいまかいまかと待ちわびていた――。

3　地下牧場

昇降機で地下に降りる四人を一人の兵士がひやかした。
「また時間のむだか……。」
「わかってんじゃないか。」
操縦士のジョンは冗談めかしてそういったが、腹わたは煮えくりかえっていた。軍の奴らには、こんな下っ端の兵士にまでばかにされている。
蟻の巣のようにはりめぐらされた広大な地下通路に出たとき、一行はカートに乗ったスティールとリクルズという下品な二人の兵士のお出迎えを受けた。二人は牧童の仕事に向かうところだった。なかでも親分格のスティールは、ちびた葉巻をくわえながら、にやにやしながらいった。
「収穫は？」
マックダーモットが答えた。

「ゼロだ。」
「どこまで行った？」
今度はサラが答えた。
「両岸100マイルよ。」
ねずみのようなちびのリクルズは、憔悴しきったミゲルにいった。ミゲルも同じ兵士なのだった。
「さあ、乗れよ。あと二匹、捕まえに行くぞ。」
サラが食ってかかった。
「博士はなにを考えてるの？　彼は寝てないわ。ほかの人じゃいけないの？」
スティールが容赦なくいった。
「ほかの人だと？　俺たちしかいないんだぞ。」
「でも、あなたたち二人で行くのは危険すぎるわ……いいわ、わたしが行くわ。」
サラはミゲルのかわりに自分が行くといいだした。
「あんたのお友達になにかあったのか？」
スティールは彼女とミゲルができていることをいやみったらしくいったのだ。
ミゲルはあわててつけ足した。

「なんでもない、俺も行く。」
　こうして、サラとミゲルが二人といっしょに牧場に向かうことになったが、その間に操縦士のジョンと無線技師のマックダーモットは、そそくさと自分の部屋に引きあげてしまった。もちろん、彼らは民間人だから行く義務はない。しかし、事情が事情なのだ。サラはミゲルといっしょにカートの後部座席に後ろ向きにすわりながら、引きあげていく二人に非難がましい視線を送った。

「さあ、楽しもうぜ。」
　地下の牧場に着くなり、スティールがそう叫んだ。この地下貯蔵庫のもっとも奥地は、廃坑のように枝分かれした坑道が、いくつも網の目のように張りめぐらされていた。コン

クリートで裏打ちもされていない土のむきだしになった切り通しが、まるで迷路のように広がっている。
　その手前には木枠でがんじょうに作った、生け捕り用の木柵がしつらえてあった。
　作業に入るまえに、サラはクリップ・ボードにはさんであった表に目をやり、愕然とした。彼女は地下にいるのがいちばん合っているネズミのようなリクルズに食ってかかった。
「なんてことよ、前回捕らえたのが15体だけなんて！　そんなはずないわ。」
「つけ忘れちまうんだ。」
「こんな大切なことを。つけとかなきゃダメじゃない。なんて頭してるの？　のこりがわからなくなるのよ！」

木柵のてっぺんにある足場の上にのっかって、スティールは坑道の方に向かって叫んだ。

「出てこい、ウスノロども！」

薄暗い坑道には、野獣どころか牛一頭いない。

一同は木柵の間のすきまから、その薄暗い回廊を見ていた。なおもスティールが叫んでいる。

「お迎えだぞ。さあ、来いクソども。」

すると、枝分かれした回廊から一体、そしてまた一体と恐るべきゾンビどもが、例の無器用な足どりで坑道の中心に集まり、死者さえ呼びさますような不愉快きわまりないうめき声をあげて、今度はこちらの木柵の方に向かってきた。

ここはただの牧場ではなかった。事もあろうに、自分たちの命を奪いかねないリビング・デッドどもを彼らはまさに自分たちの安息の地の中に飼っていたのである。牧童といっても死者の牧童だったのだ。

「なにをぼやぼやしてやがる。さあ、来い！」

なおもスティールは安全な足場の上でほえていた。

「怖いのさ。フランケンシュタインになにをされるのか、怖がってるのさ。」

と、リクルズは誰とはなしにつぶやいた。

　そばにいたサラがいった。

「だとしたら、彼らにはものがわかるのよ。たしかにわかってきたんだわ。」

　そんなことにはおかまいなしに、上のスティールは汚い言葉で彼らを挑発していた。彼らを欲情させるには汚い言葉など必要なく、ただ生きた人間の体臭を嗅がせるだけで十分だとも知らずに。

「来い、いい物を見せてやる。ほら、こっちにいいものがぶらさがってるぜ。くれてやる、咬みとってみろ。」

と、スティールは自分の一物を前に突きだすまねをして見せた。

「俺のは超特大だぜ。だが、彼氏の前でレディーはヨダレを流せないよな。」

　スティールはサラとミゲルの二人をにやにやしながら見て、あてこすった。

　サラはきっとスティールを下からにらみつけながらいった。

「人類学以外には、あんたになんか興味ないわ。」

「なんのことだ。」

　スティールはちょっとでもハイレベルな冗談にはついていけなかった。ネズミのリクルズが、助けぶねを出した。

「穴居人だといったんだよ、バカだな。原始人だと。地下に長くいすぎてよ。だけど、気にすんなよ、スティール。原始人はナニがでかいんだ。」

そういうと、二人はげたげたといやらしい笑い声をたてた。スティールがまたほら穴に向かって叫んだ。

「ウスノロども早く来やがれ。このスティールさまがお待ちかねだ。」

ウスノロのなかでもはしこいのが、もうスティールの足元まで来ていた。スティールは、猛牛を追いたてるときに使うような長い突き棒(プロッド)をそいつの方に突きだした。そして、棒の先でゾンビを刺激しつつ、まるで暴れ牛を扱うように木柵の中へ追いこむのだ。

棒で突っつかれて興奮したそのゾンビが暴れだした。スティールは、柵(さく)の一部になっている扉を開け、まず一体を木柵の中に閉じこめた。てぎわよくやらなければ、後ろからきたゾンビにその棒をつかまれ、ぎゃくに向こう側に落とされかねない。

土け色をし、目の落ちくぼんだゾンビが、口から緑の粘液を吐きだしながら、ウーウーと木柵の中からスティールの足につかみかかろうとしていた。しかし、もうすこしの所で手が届かなかった。

今度は中で待ちかまえていた人間たちが、そのゾンビの首に先に革の輪っかがついた突き棒を巻きつけ、中に運ぶのだ。

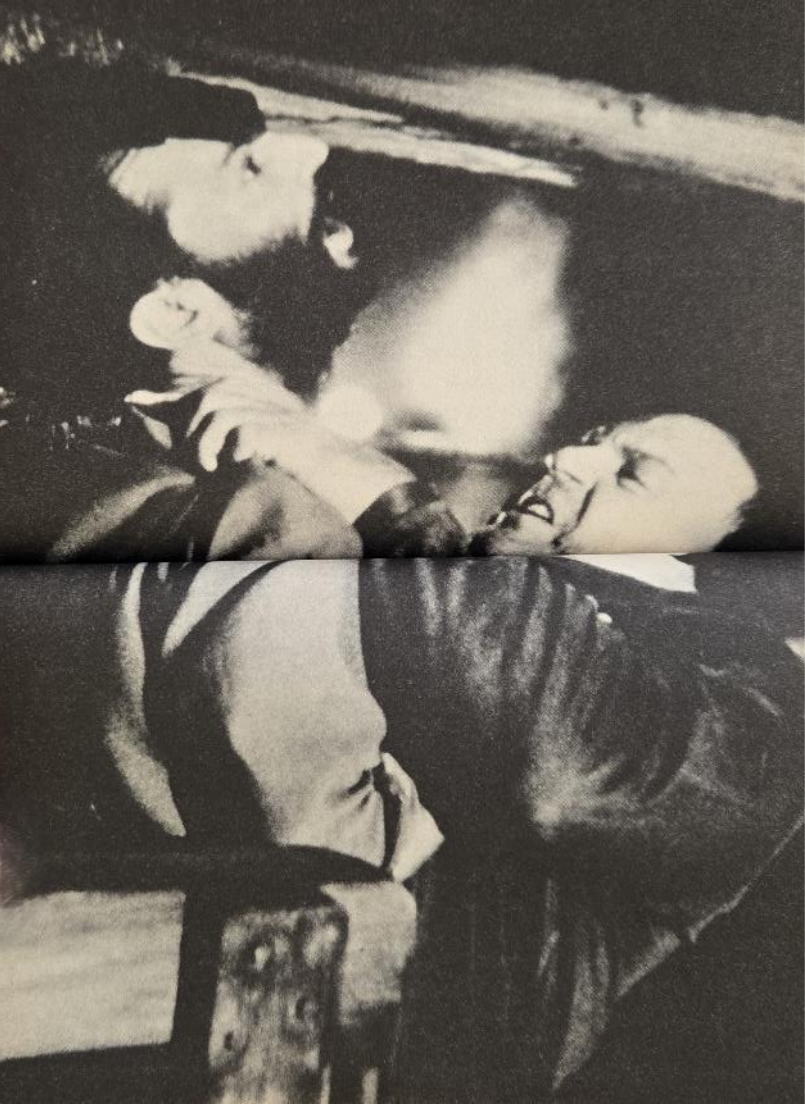
サラがむりだというのも聞かず、疲れきったミゲルがその役を買って出た。事件はそのときに起こったのだ。

一体めの首に突き棒の輪っかをかけ、いよいよ中にひっぱりこんだミゲルは、体の一部を傷つけられないように、暴れるゾンビを懸命におさえていた。すこしでも傷つけられたら、死が伝染してしまうのだ。

スティールはまたべつのゾンビを木柵(もくさく)の中に入れた。そのときだ、一体めのゾンビをおさえていた輪っかのついた突き棒を、ミゲルはつい放してしまった。故意ではない、極度の疲労のあまり、手に力が入らなくなったのだ。ゾンビはリクルズのほうに近づいて、いまにも彼の肉をむさぼろうと襲いかかった。

「スティール、助けてくれ！」

リクルズのその哀れな声を聞きつけたスティールは、すぐに腰に下げていたピストルでゾンビの頭部を吹き飛ばそうとした。ところが、サラがその突き棒をとっさにつかんで、必死におさえたので、大事にはいたらなかった。怒ったのはスティールだ。

スティールは、放心状態で柵の内側につっ立っていたミゲルを柵の上の足場まで怪力で持ち上げて、二体めのゾンビが半狂乱になってもがいている柵のほうへミゲルの首を近づけながらいった。

「リクルズが死ぬところだったんだぞ。ふざけやがって。」
下の柵の中ではミゲルの生首を欲しがってゾンビが飛びはねている。ミゲルの首にかかっている、コインのお守りのついたネックレスがゾンビの指に当たって揺れている。それぐらいもうすこしで届きそうな勢いだった。スティールはミゲルをどんどん下に近づけた。
「このスペイン野郎め！」
しかし、スティールのその手を止めたのはサラが向けたライフルの銃口だった。彼女は本気だった。
「離すのよ。彼には土台むりだったんだわ。撃つわよ、ほんとうに！」
彼女のマジな形相にスティールは手をゆるめ、しかし腹の虫のおさまらない彼は、ミゲルを近くにあったガソリン缶の山に投げ飛ばした。近くにあったといっても、二、三メートルはあった。ミゲルは空のドラム缶を直撃し、それでも一命をとりとめたのだった。
あきれたスティールとリクルズは、二人をそこにのこして計二体のゾンビを研究所の実験室に運んだ。そして、嚙みつかれないようにうまく突き棒を操りながら、そのゾンビをがんじょうな鎖で壁の金具に結びつけ、引きあげた。
その二体をなんのために使うのかもしらず、ただ実験に使うとだけしか知らされていない二人は命令に従ったのだ——。

4　腐乱ケンシュタイン博士

だだっ広い作戦会議室では、若い科学者のテッドが軍の指揮官であるローズ大尉と口論していた。そばでスティールとリクルズもその話を聞いていた。
「無菌室が必要なんです。研究の半分は汚染でだめになる。」
と、テッドはいった。
「いまのままでやれ。」
「不可能だ。いいですか……。」
ローズは尻の青い科学者のいうことなど聞こうともしなかった。
「わかってる。君たちはお友だちをむだに始末しすぎる。」
ローズは科学者たちが実験に供するといっては、ゾンビどもをやたらに始末し、そのたびごとに兵士から犠牲者が出ることを腹にすえかねているのだ。これ以上の設備の拡張などとんでもない話だった。

「いいですか、前任のクーパー少佐が約束してくれたん……。」
「少佐は死んだよ。指揮官は俺だ。いいか、いまあるもので研究しろ。そして早く成果を見せるんだ。いつまでも待てんぞ。」
「こんな状態で研究成果などむりってもんだ。」
そのとき、体育館のように広い会議室の遠くに見えるドアが開いて、サラが入ってきた。彼女はつかつかと会議室を横切ると、テーブルの前にすわっている彼らに向かって立ったままでいった。
「いま、わたしたちは絶望的な状況にいるのよ。おたがいに力を合わせてやっていかなくては。おたがいを必要としてるのよ。」
言葉をさえぎるようにローズ大尉がいった。
「君らが我々を必要としてるんだろ。我々は君らを必要とはしておらんよ。」
「いいぞ、ときたもんだ。へへへ。」
スティールが茶々を入れた。ローズはこめかみに青筋をたてながらいった。
「君らがいったい向こうでなにをしているのかもしらん。俺の部下がいったいなんのためにケツっぺたをすりむいてがんばってるのかもな。」
サラは一歩も引きさがらなかった。

「おたがいに助け合えば危険だってもっと減るわよ。ミゲルはまいってるわ。」
「あのくそったれがか？」
スティールはリクルズとともにへらへら笑いだした。サラはかまわずいった。
「回復するまで任務をはずすべきよ。」
「だめだね。」
ローズはとりつくしまもなかった。
「もう精神がくたくたになってるのよ。」
「黄色のスペイン野郎がか？」
スティールがそういってまた茶々を入れると、リクルズとともに二人は下品な笑い声をあげた。サラは負けずに続けた。
「彼の精神状態はもう極限にまできてるわ。安静が必要よ。」
しかし、そんなヤワな話が通じる指揮官のローズではなかった。おまけに隊長ともあろう者がこんなことまでいいだしたのである。
「奴め、夜遊びが過ぎるんだろ。君のお相手でな。」
サラとミゲルの仲は周知の事実だった。やっかみもあったろう、なにしろこんな男臭いシェルターの中に女は彼女一人だけだったのだから。しかし、二人の心が離れだしてるこ

とを知ってる者は当の二人だけだった。
「人の生命（いのち）の話をしてるのよ。みんなにも危険をおよぼすわ。」
「なら、隔離してやろう。それならどうだ、スティール？」
ローズはスティールのほうをちらっと見た。スティールはすっかりその気になっていった。
「オリを作ってやりますぜ。こいつは長い冬になるぞ。」
スティールはリクルズといっしょに好色そうにけたけた笑った。
これ以上なにも話すことはないと悟ったサラは、相棒の科学者にいった。
「テッド、行きましょ。」
そういうと二人は席を立ち、歩きはじめた。
二人の後ろ姿に向かって、指揮官のローズは念を押した。
「今夜七時にミーティングだ。全員出席しろ、全員だぞ。博士も、おまえの男もな。」
サラは後ろも振り向かずにいった。
「彼は薬で眠ってるわ。」
「いいか、人手不足なんだ。俺の許可なくかってに眠らすな。」
「わかりました（イエス・サー）、くたばれ（ファック・ユー）サー。」

サラはそういって、会議室のドアを後ろ手に思いきり閉めた。ばたんという音がだだっ広い会議室に虚しくこだました。

研究室が並んでいる廊下を二人は歩いていた。テッドがサラに話しかけた。

「一難去って、また一難だ。ローズめ、クーパーよりまだ悪いな。気をつけたほうがいいよ。女になにするかわからん。」

「だいじょうぶよ。バカはさせないわ。我々の論理を教えこむのよ。」

「まず不可能だな。」

「ねえ、ローガン博士は?」

テッドが自分の研究室の前で立ちどまったとき、サラがそう聞いた。

「フランケンシュタインか? 研究室にきまってるさ。」

サラはテッドとそこで別れ、廊下の奥にあるローガン博士の部屋を訪れることにした。その部屋に入るのも不気味だが、そこに行くまでのほうが不気味だと彼女は思った。なにが起こっているかわからない無機質な廊下を歩いているときのほうが——。

ローガン博士はサラも含めた三人の科学者のなかでもいちばんの年長者だった。頭髪はもう白く、ずり下がった老眼鏡ごしに人をじろっと見るその目にはなんとも愛嬌があふ

れていた。とてもフランケンシュタインなどと仇名されるほど怪異な容貌ではなかったが、その仇名は彼の風貌を恐れてのことではなく、もちろん彼のやっていることに対してだった。彼は生体解剖などという生ぬるい実験にとりかかっていたのではなく、かのフランケンシュタイン博士さえ眉をひそめるような腐乱した屍体の解剖にとりかかっていたのである。

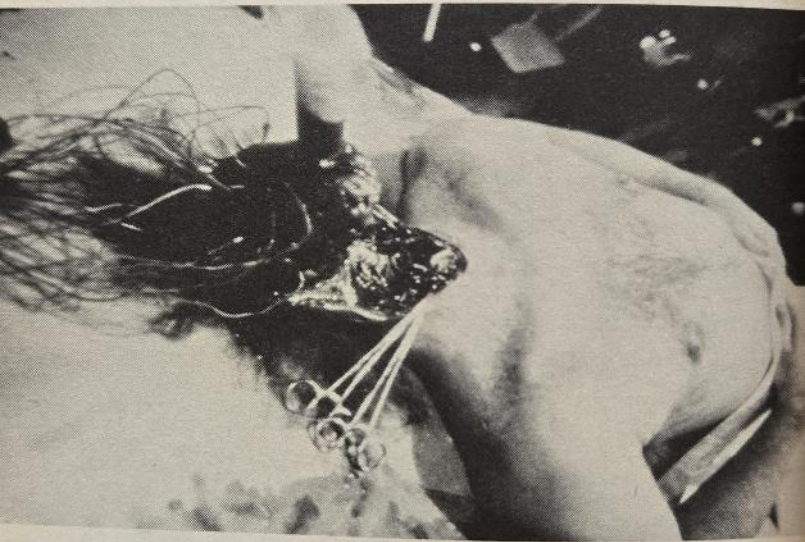
サラがローガン博士の実験室に入ると、洞穴のような暗い室内には何台も手術台が置かれ、中央に鎮座している手術台には死体が一体、そして居並ぶ器材の中で博士は自らの報告をテープレコーダーに吹きこんでいた――。

「人間のもつ認識作用は失われている。それは明らかに前頭葉、後頭葉などの腐敗の結果によるものだ。だが再生により腐敗の進行は遅らせることができる。この個体どもの生存は数年だ。だが、再生処理により10年は延命できる……。」

サラが鼻をつく異臭をこらえながら薄暗い実験室を横切ろうとしたとき、背後からなにかが飛びかかってきた。ウーッというその声に彼女が振り返ると、それはプロレスラーほどの上背があるゾンビだった。襲われることこそなかったが、こんなところにゾンビをおいておくなんて……。首を鎖でつながれたそのゾンビは物欲しそうに彼女のほうに手を伸ばし、また、ウーッと叫んだ。

サラが博士のいる手術台のほうへ行くと、博士はあいさつもなしに話を続けはじめた。
「彼らを動かすのは脳だ。血液も内臓もない。こいつはその例だ。」
　博士は中央の手術台の上に置かれた屍体の前に立った。それは毒々しい色の腐乱した臓物を、あばらの白骨を露わにしたゾンビだった。生きた人間を手術台に縛りつけるように、そのゾンビも首といい、四肢といいがんじょうな革で縛りつけられていた。
「脳と手足だけで生きている。見てみろ。」
　博士はそういって血にまみれた自分の手をそのゾンビの前にかざすと、そのゾンビは博士の手をつかもうとぴくぴくと手を動かした。
「私を欲しているのだ。食糧をな。胃もない

のに、消化もできんのに食糧を欲しとる。」
鉗子(かんし)ではさまれたそのゾンビの内臓は、赤紫色に腐乱し、いまもひどい悪臭を放っていた。
「本能だよ、奥にひそむ根源的な本能だよ。」
博士がなにをいいたいのかサラにはわからなかった。無論、用語の意味はわかる。しかし、それによって博士がなにを説明しようとしているのか、この実験によってなにを敷衍(ふえん)しようとしているのかは、彼女がいくら科学者でもわからなかった。
博士は思いあまってそばの黒板の前に立ち、脳の図解がいくつも書かれている黒板を指差しながら彼女に熱弁をふるった。
「腐敗は前頭葉、新皮質から始まり、中脳におよぶ。だが、脳の中枢が腐るのは最後だ。それが〝R〟複合体だよ。有史以前の爬虫類(はちゅうるい)以来の脳の中枢だ。見ろ、〝R〟複合体がないとどうなるか。」
博士はそういうとべつの手術台へ彼女をうながし、その手術台の上にかけられている白い布をはぎとった。布の下にあったのは頭蓋(ずがい)の大部分を剝離(はくり)され、むきだしになった脳みそがぶよぶよと頭部にかろうじて安置されているだけの、見るも無惨な屍体(したい)だった。
「この屍(しかばね)から取り去ってみた。」

DAY OF THE DEAD

た。博士は自慢げにいった。なるほど、この屍体はおとなしかった。ぴくとも動かなかった。しかし、博士がその脳に張りめぐらしたワイヤーによって電流が作りだす仮の〝R〟複合体を流すと、みごとに、いやばかばかしくも、そのゾンビははじめは左の手を、そして右の手を交互に持ち上げた。まるで生き血を欲するバンパイアのごとく。博士はこの改造人間ならぬ、改造屍体についての話を続けた。

「たとえ五感はあっても、もう従順なものだ。本能は消されてる。運動作用はある。考える力もある。これなら飼い馴らせるぞ。我々の望むように行動させられるのだ。ほんの一握りの人間だけができる大手術でね。」

博士はゾンビを改造することによって、ゾンビに大手術を施すことによって、彼らを飼い馴らせると信じきっているのだ。羊のように従順なリビング・デッドを創造できると信じこんでいるのだ。

サラは拍手を送るどころか、そんな現実ばなれした狂気じみた考えを一笑にふした。

「もっと実用的な研究をすべきだわ。」

「そのためにも必要だ。この研究をやめる気はないよ。これがすべての根本なのだ。」

「まえにはべつの説を立ててたわね。それも解決しないで、またつぎをなんて。あなたは定義づけに時間をむだにしてるわ。標本を切り刻んで、役に立たないことばかり。地上で

彼らを集めるのはとても危険なのよ。」
　そのとき、異様なものがサラの目にとまった。ぐじゃぐじゃに崩れた屍体のようなものが暗がりに転がっていたのだ。
「これは？」
「手に負えんで破壊した。だが役に立ったよ。」
　こんな屍体があちこちにごろごろしているのだろうか？　サラは空恐ろしくなった。
「博士、軍の連中はもう協力しないわ。いまの標本がきれればもう終わりよ。研究も中止されるわ。」
　身を賭して地上でゾンビを捕獲し、地下牧場にそれを放ち、こうしてすこしずつ標本にされているのは、すべてこのくるった実験のためだった。しかし、サラの抗弁にもかかわらず博士はこともなげにいった。
「研究の成果を見せてやる。手術なしでもこいつらを飼い馴らせることをな。実体がわかれば、近づく方法もわかる。手なずけることもできる。研究を続けるのだ。」
　そしてまた、サラはみょうなものを目にした。軍服が足元に落ちていたのだ。しかし、ただの軍服ではなかった。それは将校のものだった。将校の軍服なぞ、そうやすやすと手に入るわけがない。となると……。サラのそんな恐ろしい考えを先まわりして、博士は脳

が露出した屍体（したい）に白い布をかけながらいった。

「そうさ、これはクーパー少佐だ、必要だったんだよ、サラ。」

やはりサラの予感は的中した。博士はこともあろうに今朝死んだばかりの新鮮な少佐の屍体を解剖していたのだ。あの、頭蓋（ずがい）を剥離（はくり）され、電流を流され手を動かしたのは、かつての指揮官クーパー少佐だった。いまや前指揮官だった彼は、死して後に博士の手によって指揮されていたのだ。

博士は続けた。

「奴（やつ）は死んだほうが役に立ってる。」

博士はまた老眼鏡の奥から愛嬌（あいきょう）のある目で彼女を見た。こんなに愛嬌のある目の奥には、なんと忌（い）むべき、なんと恐るべき思念が脈打っていることだろうか？　サラは詰め寄った。

「じゃあ、あの墓は？」

「標本を埋めたよ。」

「なんてことを……彼らに知られたらどうなると思うの？　わたしたち、みんな……。」

〝殺される〟といいかけて、サラは身ぶるいした。博士はいうにこと欠いてこんなことをいった。

「わかりはせんよ、こんな変わり果てた姿ではな。」

そのとき、突然、恐るべきことが起こった。中央の手術台にのせられていたゾンビが起き上がろうとして、手を縛りつけているがんじょうな革帯を、いとも簡単にひきちぎったのだ。そして、サラに襲いかかろうとして半身を起こしたとき、むきだしになっていた臓物がずるずると外にこぼれだし、かつては肝臓、脾臓、膵臓だったらしい腐乱した臓物を腐った血とともに床にだらだらと落としたのだ。それでも怪物は彼女のほうに歩いていこうとした。

サラは恐怖よりも、その気味の悪さに思わず嘔吐しそうになった。まるで喉の奥に恐怖が指を突っこんだかのように——。

しかし、博士はすこしもとりみださず、そのゾンビの前頭部、いわゆる眉根に電気ゴテ様の強力な電流を流す電極を当てた。ゾンビはあっというまに意識を失った。前頭葉を切除するロボトミー手術は生ける屍にも有効だったのだ——。

5　処刑会議

夜の七時になると、作戦会議室でミーティングが行われた。もっとも、夜のといったって、この地下基地では夜と昼の区別がつくわけではなかった。
民間側からはローガン博士をのぞく科学者のサラとテッド、ヘリコプターの操縦士のジョン、無線技師のマックダーモットの四人、軍側はローズ大尉、部下のスティール、リクルズで以下全員が出席していた。
ミーティングはなにやら怪しい雰囲気で始まった。
「だめだ。短波も中波もまるで応答がないんだ。」
と、無線技師のマックダーモットが口火をきった。
「どこかに我々みたいなグループがいるはずだ。」
と、ネズミのリクルズが殊勝らしくいった。
「俺たちしかのこっていないのか……。」

操縦士のジョンもぽつりといった。
マックダーモットは続けた。
「電波が十分に届かないんだ。俺の使っているのはなにしろ古ぼけた無線機なんだからな。」
「ちゃんと直せよ。それから、しばらく酒をやめるんだな。誰かを呼びだせ。すぐにな。」
スティールは、こうしてミーティングの最中にも携帯用の容器でちびりちびりやっているマックダーモットを非難した。
痛いところを突かれたマックダーモットは語気を強めた。
「どうせここにいれば、いずれ酒もなくなって飲めなくなるんだ。それまで俺は好きに飲む。そしてサビた無線機を精いっぱい直してやるよ。」
「おまえの精いっぱいは腑抜けなんだよ、このボケ！」
「誰が好きでこんなところに閉じこめられてる？　その小汚ねェツラとわかれるために必死でやってるのさ。ただ……ただ……。」
マックダーモットは消え入るような声でいった。
「もう生きのこってるのは我々だけか、古い無線機の電波が届くところに誰もいないのか、そのどちらかだよ。」

さっきからマリファナを吸ってばかりいた兵士の一人がいった。
「むかしはワシントンとしょっちゅう連絡がとれたじゃないか。向こうにもこっちのことが聞こえたぞ。」
「あれは中継だ。直接じゃないんだ。国じゅうの電気はもう切れてる。ショッピング・センターへ買物にも行けんよ。」
「くだらん冗談はやめろ。ふざけてると酒ビンをケツに突っこむぞ。」
と、スティールはマックダーモットにむかっ腹を立てた。

そのとき、サラがすくっと立ち上がり、こういった。
「子供のけんかはもうたくさんよ。行くわ。」
と、彼女はかってに席を立った。
「まだだ、すわってろ。」
そういったのは、ローズ大尉だった。
「まだ、なにか？　今週の報告も終わったわ。」
「屁にもならん報告だ。等式だの公式だの、りっぱなごたくばかり並べやがって。すこしは役に立つことを報告できんのか。みんなでマスでもかいてんのか？」

すると、このときとばかり、ネズミのリクルズが下品な冗談をいった。
「彼女はマスなんかかかねえよ。デカいチンポコのお伴がいるからな。スペイン製のチンポコがよ。」
いまはいくら二人の間が冷えきっているとはいえ、ミゲルと自分のことをからかわれて、サラはかっとなり、席を立ってかまわず部屋をつかつかと歩きだした。
「まだ終わってない。すわれ！」
と、ローズはいった。サラはどんどん歩いていく。
「すわらんと撃ち殺すぞ！」
その言葉でサラはくるっと振り向き、相手をにらみつけた。
ローズはさらにいった。
「撃つといったんだ。」
「気はたしかなの？」
「はい、そうですよ。先生。席にもどらんと撃ち殺すといったんだ。」
科学者のテッドがローズに食いさがった。
「なんの権利でそんなことを……いつから軍の支配下になったんだ？」
「俺がここの指揮官になってからだ。スティール、女を撃て。」

と、ローズは部下のスティールに命令した。
　スティールは指でピストルを撃つまねをして、サラにいった。
「バン！　あんたは死んだぜ。」
　スティールとリクルズはけたけたと大笑いした。しかし、ローズ大尉は真剣だったのだ。彼は立ち上がり、抜いたピストルの銃口をスティールに向けながらいった。
「撃たねば、おまえを撃つ！」
　へらへらと笑っていたスティールの顔がひきつり、青ざめた。
「冗談だと思うか？　俺は本気だよ。五つ待ってやる。もうおまえは二つ損してるぞ。」
　ローズはもう数えていた。
「……3……4……。」
「すわれよ、サラ。」
　操縦士のジョンが見るに見かねていった。
「なんだってのよ？」
と、サラはいった。
「黙ってすわれよ、サラ。」
　ジョンは彼女を懸命になだめた。

「五つだぞ。」

と、またローズが念をおした。そして目をぎらつかせながら、スティールに狙いをつけたピストルの撃鉄を引く。

「わかったよ。」

と、スティールがしぶしぶ銃を抜こうとしたとき、サラは自分の席にもどり、腹立ちまぎれに、折りたたみいすを一度床にたたきつけて、すわった。

ローズは銃をしまい、一同を睥睨しながらいった。

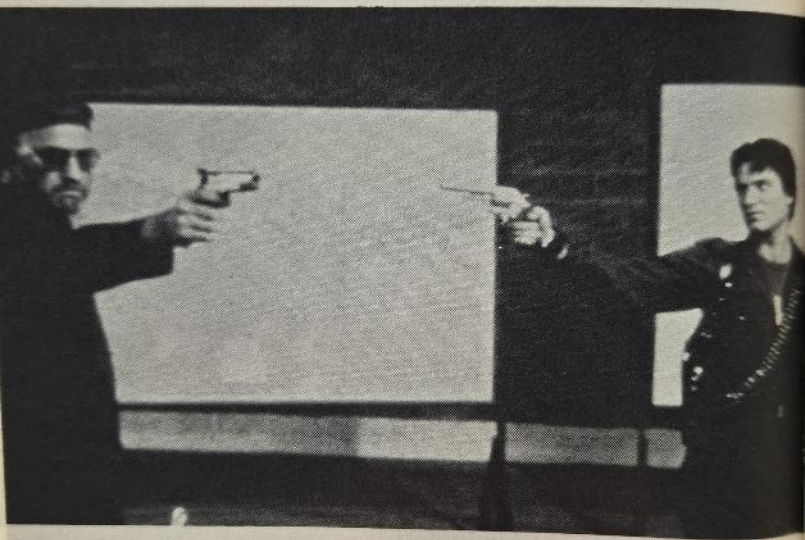
「誰も俺のいうことに文句はあるまいな。こいつは楽しい遠足じゃないんだ、戦争なんだ。俺がここにいるのはクソいまいましい任務のためなんだよ。」

科学者のテッドが負けずにいった。

「君の任務は我々科学者を助けることじゃないか。我々は市民だ。君の暴政には従わんぞ。」

「誰がなにに従わんだと。おまえの仲間は一人、我々は五人を失ったんだ。なぜ、俺たちがあの化け物たちのお守りをしなきゃなんない？　化け物どもを一匹のこらず撃ち殺してもいいんだ。」

と、そのとき、会議室の奥のドアが開き、フランケンシュタイン博士ことローガン博士が中に入り、よく通る声を会議室の中に響かせた。

DAY OF THE DEAD

「ぜんぶ撃つには弾が足らんよ、大尉。つぎからつぎに現れるぞ。奴らはあふれとる。ものすごい数だ。勝ちめはないね。私の計算では40万対1だ。」

博士はテーブルのそばまで来ると、すぐに腰かけた。

「食い物はあるかね？」

その傍若無人な態度にローズ大尉はかりかりした。

「七時に集まれといったはずだ。」

「手が放せんでな。食い物は？」

いくら科学者が無神経といったって、博士の右に出る者はいなかった。おそらくはまた例の屍体解剖をいまのいままでやっていたのだろう。その血だらけの白衣が物語っている。そしてその恐るべき残像が脳裡から消えぬうちに、人一倍の食欲を見せているのだ。

「いいか、教えてやる……。」

そのローズの言葉をさえぎって博士はいった。

「すまんが食い物は？」

ローズの堪忍袋の緒が切れた。

「俺がここの指揮官だ。いったい、いままでなにをしていたのかいってみろ。なにもしていなかったんなら、おまえの大切な標本どもをバラバラにして、俺たちはおさらばだ。お

DAY OF THE DEAD

まえらも標本どもも、この下水で腐らせてやる。それでも食ってるんだな！」
博士はしれっとしていった。
「どこへ行くね？　わたしの標本を殺したとしても、外にはウヨウヨいるぞ。ぜんぶをやっつけられるかね？　数字的に勝ちめはないよ。負けだね。勝つためには……。」
「なんだよ。フランケン博士よ。」
と、今度はスティールがさえぎった。
博士はほんの一瞬間をおいてからいった。
「飼い馴らすのだ……。」
「くるってるぜ。こんな奴と働くために金をもらってるんじゃないんだ。」
スティールがうっかりそういうと、兵士の間でざわめきが起こった。子分のリクルズまでが騒ぎだしている。
「俺は金なんて一銭ももらっちゃいねえぞ！」
「もういい、黙れ！　黙るんだ！」
ローズがそういうと、汐が引くように兵士たちは静かになった。
「いったいなにがいいたいんだ。フランケン博士？」
「すぐお見せするよ。サラには見せたんだが……、進歩してるだろ？」

博士がサラにそういうと、彼女は軍側には加勢したくないあまり、こういった。
「ええ、進歩はしてるわ。」
ローズはいきりたった。
「なんの進歩だ？『飼い馴らす』とはなんのことだ？」
博士は得々としてしゃべった。
「我々を食糧と思わせない、ということだよ。我々の思うように彼らをコントロールするんだ。」
「ごたくを並べてないで見せてみろ。」
「まもなくさ。」
「答えが出るには何年かかるか。」
「一朝一夕にはできんよ。」
「永遠にできんかもな。」
「薬品にも限りがある。器具もひどいもんだ。」
「マックダーモットも無線は役立たずだといいやがった。今度はおまえまで文句か！弾薬は減るばかり。部下まで減ったよ。」
「急ぎすぎたのよ。数日でカタをつけようとして。」

と、サラが、博士とローズの話に割って入った。ローズの目はどこか遠くを見ているようだった。
「一瞬にしてカタをつけてやるぜ。いいか、俺は本気だ、もうここともおさらばだよ。」
そういう隊長のローズに、博士が聞いた。
「また聞くが、どこに行くんだ？　選択の余地などないのだぞ。我々がいってきたように数週間待つんだ。」
「研究が終わるまでずっとよ。ワシントンに生存者がいるはずよ。もっと設備のいいシェルターでね。」
サラがそういうと、兵士の一人がつぶやいた。
「よせやい！」
サラはかまわず続けた。
「わたしたちのことを知ってる人たちが、連絡できずに、探してくれてるんだわ。」
ローズ大尉が我慢しきれずに叫んだ。
「黙れ！　……よし、もうすこしおまえたちに時間をやろう。ほんのすこしな。どれだけやるとはいわんぞ。しかしな、成果は見せるんだ。怒らせんほうが身のためだぞ。いいな？」

ローズはみんなの顔をキッとにらみつけた。

「いいか、俺にはなにも隠しだてするな。俺の命令に背いた者は軍法会議にかけて処刑してやる。」

ローズは民間人のほうばかりでなく、スティール以下の兵士たちのほうもにらみつけた。

「俺は本気だぞ、覚えておけよ。」

さっきのことがあるだけに、ローズの言葉には説得力があった。ゲリラ戦の勇士のごとく、彼の両肩からたすきがけに下げられた二本の弾薬ベルトの、金色の弾丸が、悪魔の口の金歯さながらにキラリと光った——。

6　天に穴をあけた人々

ミーティングが終わって作戦会議室を出たサラは、操縦士のジョンと廊下を歩きながら話しこんだ。

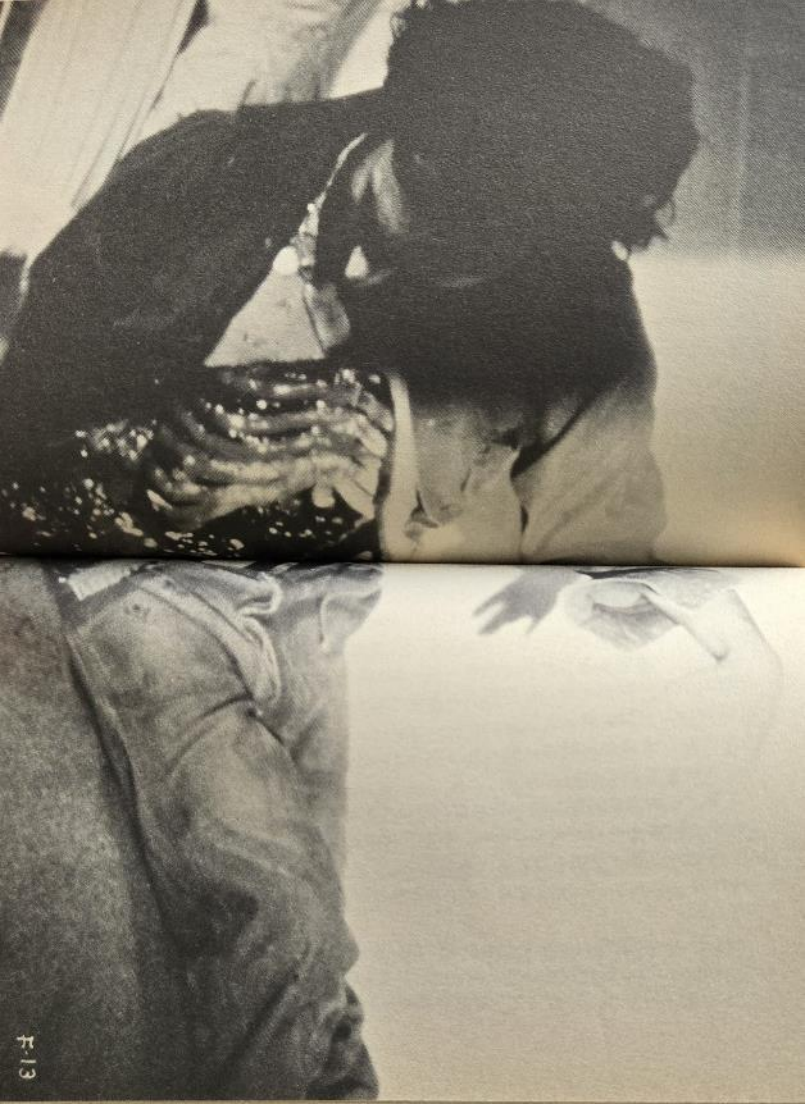
「彼はきっと撃たなかったわ。」

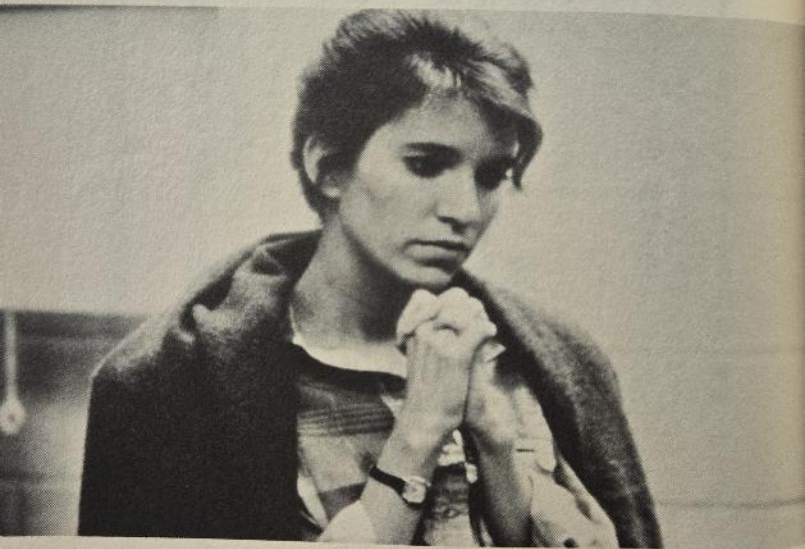
「ああ、彼はきっと撃たなかったさ。スティールに撃たせただろうよ。」

常日ごろから計器ばかり睨んでいるジョンの言葉はそれこそ機械的で、冷酷な響きがあったが、いつもそれは正論だった。正論だからサラはどうも好きになれなかったのだ。

しかし、一瞬のうちに判断を下さねばならない彼の職業においては、それが生きる道だった。いや、彼の場合だけではない。こんな生き地獄から抜けだすには、冷酷になることこそが生き伸びる知恵であり、冷酷さに暖かみを感じられるぐらいの度量が必要だったのだ。

「彼だって人間よ。」

「そうさ、人間さ。だから怖いんだ。」
ジョンはジャマイカ訛りのたどたどしい英語でなにかもどかしそうにいった。
「ビリーが撃たれることはないよ。唯一、無線のことがわかるからな。」
ジョンと同室のマックダーモットを、彼はビリーと呼んでいる。彼は続けた。
「俺はヘリの操縦士だし、フランケンシュタインは十分に口が立つ。だが、あとの君たちは気をつけたほうがいい。」
「きっと、みんなで協力しあえば、心もほぐれるわ。みんな、自分の側に引き入れようとしているだけなのよ。」
ジョンの最後の言葉には、宗教的なにおいがあった。
「世界の問題はそこにあるんだよ、サラ。人それぞれ、人生から得ようとしているものがてんでんばらばらに違うんだからな。」
ジョンはそういうと別れのあいさつもせずに、一人で先に廊下を歩いていった。
しばらくして部屋にもどったサラは、壁に寄りかかりながら毛布をかぶって一眠りした。こんなところで寝たのもベッドではミゲルが寝ていたからだ。
久々に眠りについたミゲルが、やがて寝返りをうってこちらを向いた。薄暗くした室内

の明かりの中で、つぎの瞬間彼女の目に入ったものは、寝返りを打った拍子に腐乱した腹わたが、どろどろと床にこぼれだしたミゲルの姿だった。
顔は腐れ落ち、臓物はなくなり、白骨が見えていた。しかし、不思議なことに異臭は漂っていなかった。
どうして臭いがしないのだろう？ ミゲルはゾンビと化してしまったのだろうか？ わからない。わからない……。
と、そのとき、サラは壁に寄りかかったまま目を覚ました。それは夢だったのだ。ミゲルは？ ……と見ると、彼はベッドの上で天井を見ながら目を開けていた。そして、サラのほうを見ずにポツリといった。
「君もおびえてるんだろ？ 僕と同じように。鎮静剤を使えばよく眠れるぞ。ふん、君もハッタリだけだ。つまらん女さ……。」
サラの我慢もここまでだった。
「いいわ。出てって、とっとと、この部屋から出てってよ！」
ミゲルは毛布をはぎとり、自分の荷物と銃を持って、ものもいわずほんとうにとっとと出ていってしまった。勢いよく閉まるドアの音を聞きながらサラは太い溜め息をついた。
気持ちがささくれだっていたサラは、廊下の冷水器に水を飲みにいった。外で見たもの

DAY OF THE DEAD

は兵士どうしのけんかだった。どうやら、ミーティングで出た、金をもらってるもらってないの話でもめているらしい。

危うく巻きこまれそうになったサラを救ってくれたのは無線技師のマックダーモットだった。彼はサラをべつのところへ避難させ、いつもの酒を勧めた。

「いいわ、ありがとと。」

そういって断ったサラに、マックダーモットはさらに勧めた。

「ブランデーだよ。心臓にいいから。」

「肝臓に悪いわ。」

二人は思わず笑ってしまった。そういえばサラには久しぶりの笑みだった。いや、マックダーモットにもそうだったのである。この地下基地に来てから、もうどれくらい人々の顔から笑みが消えたことだろうか？　ミゲルとの愛の営みの前後でさえ、笑みはこぼれなかった。

彼女と気が合ったマックダーモットは、操縦士のジョンといっしょに住んでいる二人の部屋に酒に招待した。

宿舎とはだいぶ離れた二人が住んでいるキャビンには、豪華で有名な〝リッツ・ホテ

ル〟という手作りの看板がかけられていた。
　キャビンの前に立って、マックダーモットはベルボーイのように手を前に出してうやうやしくいった。
「ようこそ〝リッツ〟へ、マダム。」
　久しぶりの上品なユーモアに、サラは微笑みながらドアをくぐった。
　中に入ったサラは、我が目を疑った。リッツ・ホテルまで行かないまでも、どこから見つけてきた品物の寄せ集めで作ったこのホテルのインテリアは、それなりに様になっていたし、なによりもホッとした。
　まるで小さいころに洞穴や木の上に作った葉っぱの家みたいに、そこにあるありとあらゆるガラクタが本物らしく見せていた。
　南の島の浜辺が描かれたビルの看板の前に置かれたビーチパラソル、花柄のちゃんとしたソファー、エマニエル夫人がすわるような大きな籐椅子……。
　サラが部屋に入るなり、その籐椅子に腰かけた操縦士のジョンがいった。
「よう、お客さんか。文明社会にようこそ。ここは最後の砦だよ。」
「すてきね……。」
　サラは久しぶりになごんだ気分で、ドアの前の小さな階段をおりた。

「わたしたちのところよりずっとすてきよ……。」
サラがジョンの前のソファーにすわったとき、彼はいった。
「ここは多少危険だ。だが、俺たちは危険が好きでね。」
ここは兵士たちや科学者たちが住んでいる居住区(コンパウンド)よりはだいぶ離れていた。つまり、例の地下牧場のすぐそばということなのだ。自由が得られるかわりに、危険も多かった。
サラは自分が寝起きしている、コンクリートだらけの無機質な部屋よりも、どれだけいいかしれないと思った。
「お笑いね。危険に立ち向かおうともせずに……。」
「じっと待ってる……それが危険なんだ。今日でわかったろ。」
ジョンは膝(ひざ)の上に置いたスクラップブックを置きながらそういった。
「あなたって不思議な人ね。とても不思議……他の連中とは違うわ。あなたには……。」
サラはそこで言葉を切った。
そういわれるとなおさら気になるジョンだった。
「なんだい？」
「いいのよ。」
「話そうじゃないか。」

「わたしは飲みにきたのよ。そんな元気もないわ。」
「黙ってるのは素直に話すよりもずっとシンドいぞ。さあ、話してみろよ。」
さっきから酒の用意をしながら話を聞いていたマックダーモットは、サラとジョンにブランデーの入ったグラスを渡すと、ソファーの背もたれにすわりながら聞く側にまわった。
「あなたは仕事をしにここへ……。」
サラがそういいかけると、ジョンは先まわりしていった。彼には、彼女がなにをいいたいのか、だいたいの察しはついていた。だから予防線を張ったのだ。
「俺の仕事はヘリを飛ばすことさ。まじめにやってるよ。」
「わたしたちと同じ屋根の下で、同じ釜の飯を食べていながら、協力するためには指一本上げようとしないわ。二人ともよ。」
「なにに協力をする？　この貯蔵基地には大企業五百社の帳簿や記録が保存されてる。国防予算の記録も、好きな映画もある。所得申告や新聞記事のマイクロフィルムも、移民の記録や国勢調査も、戦争、大惨事、火山の爆発、火事や洪水、よき合衆国のひどい災害のありとあらゆる記録がのこってる。だが、それがなんだ？　山ほどの資料や記録が……知ったことかよ。誰がそれを読むってんだ。ここは20キロにわたる世にも巨大な墓石なん

だ。誰も読まない碑文の書かれたね……。」
マックダーモットはブランデーをあおりながら、思わず地下基地におかれたこのキャビンの中を見まわした。ここが墓石なら、そこにいる俺はなんなんだ、とでもいいたげに。
ジョンは続けた。
「そこに君が来て、また図表だの記録だのという。どうする？　他の記録といっしょに埋めてやるのか？　いいか、教えてやろう。君には答えなんか出せないんだ。星がなぜそこにあるのか誰もわからないように、これは人間が答えを出すことじゃない。君のしてることは時間のむだなんだ。のこり少ない時間のむだなんだよ。」
サラはブランデーを一口飲んでからいった。
「わたしたちにはこれしかないわ。」
「ふざけるな！　することは山ほどある。君と俺とみんなで新しい世界を始める。子供を産んで教えてやるんだ、二度とここへ来てバカな記録を掘り起こすなとな。」
サラは愕然（がくぜん）とした。ジョンが自分の子供を作りたいと唐突にいいだしたからではない。彼が黒人だからその子供を産みたくないなんて時代錯誤の考えをもったわけでもない。この地下基地にのこされた、いや人類最後のグループかもしれないこの人間の中で、自分一人が子供を産める女、いや子供を産める人類なのだと悟って愕然としたのだ。

ミゲルとのことは、ただ恐怖から逃れるための行為だった。子供を産む行為としてセックスをとらえたのなんて、正直、彼女は生まれてこのかた一度もなかった。

「ここを去るのになにか口実がほしいか？　それはこういうことだ。」

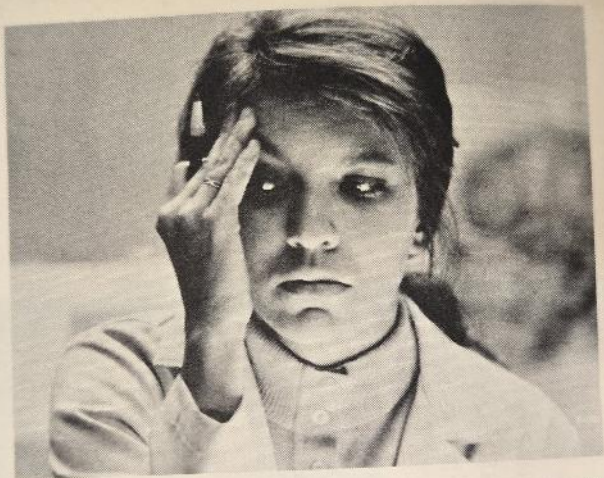
と、ジョンはサラの想いをよそにいった。

「我々は神の罰をうけた。我々はのろいをもたらしたんだ。我々の目に地獄を見せるためにな。我々がミサイルやロケットで天に穴を開けるのを神は怒ったんだ。主の力を見せつけようとしてるんだよ。我々はなんでもわかると思いすぎて、横柄になりすぎたのかもしれない……。」

ジョンはそういうと虚空の一点を見つめた。

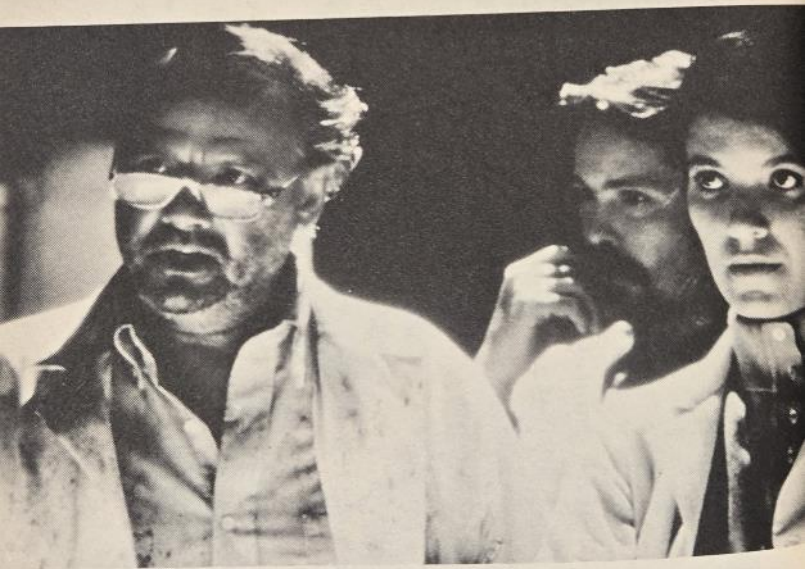
サラにとって、ジョンのその意味深な言葉は、いま傾けているグラスのブランデーのまろやかな味とは裏腹に、苦く、そして胸にぐっと迫った。

7　死霊の教科書

ローガン博士の研究がゾンビたちを飼い馴らすのが目的だとしたら、サラの研究は彼らを科学的にいかに効果的に葬るかということが主眼だった。
脳に関する薬理を中心に展開する彼女の研究は、だから解剖は必要としていない。博士との研究の根本的な違いはそこだった。しかし、問題の根絶を狙う彼女の研究は、見方によっては途方もない時間を必要としている。ジョンの言葉が突きささったのもそのせいだ。時間をただいたずらに浪費しているのだろうか？　その問題が、ずきずきと痛む偏頭痛とともに研究室にいる彼女を悩ませていた。
サラが廊下に出て冷水器で頭痛薬を飲んだとき、ローガン博士の研究室でテッドがなにやら悪戦苦闘している姿が開いたドアから見えた。彼女が行くと、テッドは鎖でつながれたゾンビに餌を与えているところだった。
「畜生、だめだ。手もつけん。」

大柄なそのゾンビの前のテーブルには缶詰が置かれていて、しかしそいつは手をつけようとしなかった。
「なんなの、それ？」
と、サラが聞くと、テッドは答えた。
「兵隊が気前よくくれた〝牛カン〟だよ。しかし、見向きもせん。」
「ひどい臭いね。」
「あいにく、上等な肉は品切れでね。」
「なにしてるの？　飼い馴らす第一歩なの？　彼らには栄養はいらないはずよ。」
そのとき、いつのまにか入ってきていた博士が横でサラの質問に答えた。
「衝動を満たしてやるんだ。いいかね、サラ。彼らは我々の線上にある。我々と同じなんだ。反応が不完全なだけなんだよ。」
博士がそういってる間にも、鎖でつながれたゾンビは鎖をひきちぎらんばかりに博士につかみかかろうとしていた。サラとテッドは思わず後ずさった。
「いうことも聞くし、おとなしくもなるんだ。我々と同じようにほうびを与えればいい。ほうびが大切なんだ。それがやっとわかったよ。見せてやろう。」
博士は子供をさとすように、今度はゾンビに向かっていった。

DAY OF THE DEAD

「いかんぞ、じつにいかん。」
そして、テッドとサラをうながし、ガラス越しにこの部屋の様子がよく見える小部屋に案内した。博士は部屋の電気を消すときに、ゾンビに向かっていった。
「暗いところでよく考えるのだ。自分がなにをしたか。」
別室に行った博士は、小さな照明だけでぽつんと一人とりのこされたゾンビを見ながら、二人に説明した。
「わたしは奴を〝バブ〟と呼んでいる。わたしの父の仇名だよ。外科医が〝バブ〟とはね。父は金持ちだった、かなりのね。研究ばかりしとったら金持ちにはなれんぞって、口ぐせのようにいってたよ。」
博士は別室のバブのほうをあごでしゃくった。
「バブは反応がいいから生かしてる。死人を生かしてるか……。」
サラとテッドはその言葉に思わず顔を見合わせ、笑いをこらえた。博士は続けた。
「最近はわからなくなるんだ。連中が生きているのか死んでいるのか……存在しつづけているとでもいっておこうか。」
博士はそういい終えると、バブのいる部屋へ行き、テーブルの上に三つの物を置いた。
それはカミソリと歯ブラシと本だった。

DAY OF THE DEAD

博士はバブに語りかけた。
「バブ、さあオモチャだ。これを使ってごらん。覚えてるだろ。」
部屋を暗くさせられたせいか、今度はバブもおとなしく、博士に向かって暴れるようなことはしなかった。それどころか、ウーウーと不気味なうなり声をあげて、まずカミソリを手にした。
そして、ブースのガラスに映る自分の姿を見ながらカミソリを頬に当て、そりはじめた。バブの腐りかけた頬の肉が細い鉋くずのように削げ落ちた。しかし、血は、したたり落ちない。したたり落ちるほど新鮮な血は、そいつの体内にはなかったのだ。
やがてバブは本を手にとった。死霊の教科書に選ばれた栄えある書物は、スティーブン・キングの『呪われた町』だった。バブはそれを読むでもなく、ただパラパラとめくり、懐かしいアルバムでも見たように、またウーウーとうなり声をあげた。
「バブ、えらいぞ、えらいぞ、思い出したんだな、むかしのことを。本は今日はじめて与えたんだ。」
博士はそういってバブを誉めた。
別室から見ていたテッドがサラにいった。
「彼はなにを証明しようというんだ? 僕はあの連中がたとえ車を運転したって、お友だ

ちにはなりたくないぜ。」

サラは博士とバブのいる部屋をブースのガラス越しに見ながらいった。

「することよりも、しないことのほうが驚きだわ。」

「どういう意味さ？」

「博士が近づいても興奮して暴れないってこと。」

「博士をおやつだと思ってないんだな。」

「夕ごはんでしょ。」

すっかり軽口を飛ばすようになっていた二人の部屋に、そのとき、ローズ大尉とスティールが入ってきた。

「お楽しみか？　なにしてる？」

ローズはそういって二人に非難がましい視線を送ると、なにかものいいたげな様子で博士のいる部屋に入って行った。

ローズは鎖につながれたおぞましいその怪物を見るや、思わずピストルを抜いた。

「その心配はないよ。彼はおとなしいから。」

博士はそういうと、今度は接続されていない電話器をバブの前のテーブルに置いた。

ローズとスティールはあっけにとられて見ていた。やがてバブは、目の前にある奇妙な白

い機械を手にとり、そして受話器を耳に当てた。
博士は自慢そうにみんなにいった。
「どうだ、すごいだろう？」
そして今度はバブをうながした。
「そうだよ、バブ。さあ、もしもしといってごらん。」
スティールが黙って見ている隊長のローズに向かってじれったそうにいった。
「バカげてますぜ。」
博士は無視して実験を続けた。
「さあ、アリシアおばさんにこんにちはというんだ。こんにちは、アリシアおばさんって……。」
するとどうだ受話器を耳に当てたバブは、
「こんち……は……アリシ……おばさ、おばさ……。」
と、たどたどしくいったのだ。
そしてバブは電話器を落とすとローズの姿を見て、なんと敬礼をはじめた。
「もとは兵隊だったのだ。答礼を。」
博士はそうローズに求めたが、大尉は鼻で笑いながらいった。

「俺がこの化け物に敬礼をしろと？　ふざけるな。」

「無視してはいかん。お手本が粗野ではしかたあるまい。」

博士はそういって、サラを呼んだ。

「弾をぬいてわたしに拳銃を。」

サラはいわれるままに弾をぬいたピストルを渡し、博士はそれをバブの前に置いた。

すると、バブは過去の記憶から、習性から、ガシャッと撃鉄を動かすと、ウーウーといいながら、銃口を大尉のほうに向けた。

「弾はぬいてある。」

と博士がいったが、ローズは自分のピストルをバブのほうにむけ、いまにも発砲しそうな勢いでかまえた。博士はなおもいった。

「バブがどうするか、よく見るんだ。」

ローズはよく見ていた。しかし、弾がぬかれているとはいえ、バブはローズを撃ったのだ。バチッという空の撃鉄の音を聞いたバブは不思議そうに銃口をのぞいて、たしかめるような身振りをした。

ローズはむかっ腹を立て、引き金に当てた指を動かした。ところが、バブの前に博士が立ちはだかったのだ。

まるで我が子の身を守る父親のように、バブの前に立ちはだかったのだ。
やり場のない怒りに言葉を失ったローズは、きびすを返し、スティールとともにその研究室をついに出ていってしまった。

作戦会議室ではふたたびミーティングがおこなわれていた。科学班の間でどんなすばらしい研究がなされているのかと内心期待していたローズは、児戯にも等しい彼らの愚劣な研究に腹わたが煮えくりかえる想いだった。

ローズは三人の科学者を呼びだし、つるしあげていた。かれらがすわっているテーブルにライフルをたたきつけながらローズはいった。

「おまえら、気はたしかか？ 奴らは死人だぞ。死人に芸を教えるというのか？」

ローガン博士はすこしも動じず、また老眼鏡の奥の愛嬌のある目で大尉を見ながら答えた。

「彼らにもほうびが必要なんだよ。いうことをきかすには。」

ほうびという言葉の意味が、そのときのローズにはまだほんとうにわかっていなかった。また、聞く耳も持っていなかった。

「奴らのツラも見たくない。」

「それは向こうも同じさ。」
と、博士は負けずにいった。
「これがあんたのいう進歩なのか？　これで俺たちを納得させるつもりなのか？」
「第一歩だ。順応の第一歩だよ。社会的行動の始まりなんだ。我々と意志を疎通させ、獣のように殺しあわずに、秩序をもって暮らすんだ。それには報酬がなければならん。報酬がなければ意味がない。まるで意味がないのだ。」
ほうび、報酬……やはり、ローズには博士のいわんとしていることがさっぱりのみこめなかった。またのみこみたくもないと、彼はこのときひそかに決心したのだった——。

8　死のないところに煙は立たない

地下牧場ではまた標本の捕獲が始まっていた。このときふたたび起きた事件が、やがてきたる阿鼻叫喚地獄の序曲になろうとは誰も予想だにしなかった。

前回のような不始末が起こらないようにと、軍側はスティールとリクルズのほかに兵士を二人増強し、民間側からは非協力的なジョンとマックダーモットをのぞいて、やはりサラとミゲルが牧童の役に駆りだされていた。

事件の口火をきったのは、疲労の極にあった、またもあのミゲルだった。

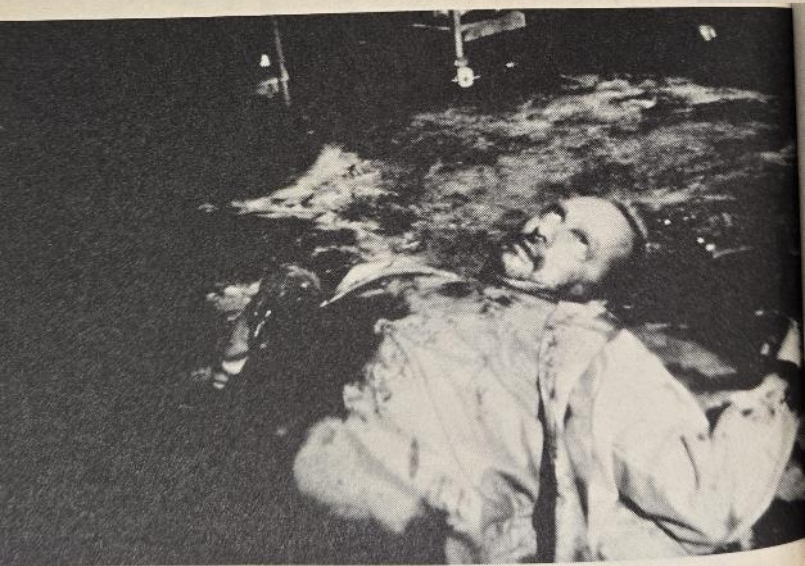
彼は木柵（もくさく）から出した主婦姿の、女ゾンビの首に輪っかをはめ、突き棒でひっぱりまわした。

そのとき、度重なる酷使で疲労していた革の輪っかが切れたのだ。

ウォーッ！

自由になった女ゾンビは、近くにいた増強兵士の一人につかみかかり、頸動脈が脈打っ

ているその男の首を食いちぎった。悪魔の小便のように勢いよく生き血をまきちらしながら、男はその場に倒れこんだ。
例によって木柵の上の足場にいたスティールが、機銃を掃射した。すると、背中を蜂の巣にされ首を吹き飛ばされた雌のゾンビの肉塊が地面に落ちた。
しかし倒れたのはゾンビばかりではなかった。ところかまわず撃ったスティールの流れ弾がもう一人の兵士に当たり、倒れこんだのだ。
一方、そのすきを見て、木柵を逃げだした今度は正真正銘の雄ゾンビが、あたりをうろつきまわっていた。
「もう、我慢できねエ!!」
ミゲルはそう叫びながら、突き棒を振りかざしてかかっていった。ところが、その棒をぎゃくにゾンビにつかまれ、ぐいぐいとものすごい力で押されたミゲルは、ついに倒れてしまい、その拍子にゾンビに腕を食いつかれてしまった。
目の前で自分の左腕がガリガリと音をたてた。
ウアアアーッ!
一瞬、鶏肉のような白い肉が見えたかと思うと、ミゲルの二の腕から血しぶきが奔流となって流れた。

DAY OF THE DEAD

ミゲルはほとばしり出る血にも頓着せず、ただ叫びながら走りだした。そうして痛みをこらえるかのように――。

サラは一瞬のことにわけがわからず、ひたすらミゲルのあとを追いかけた。

雄のゾンビがうろつきまわっていた。

スティールはそいつの背後にまわると、機銃を乱射した。小間切れになった頭部の破片が地面の上にひしゃげた。

木柵に寄りかかりながら虫の息の兵士が、スティールになにかを訴えている。ネズミのリクルズはどうしていいかわからず傍観しているだけだ。

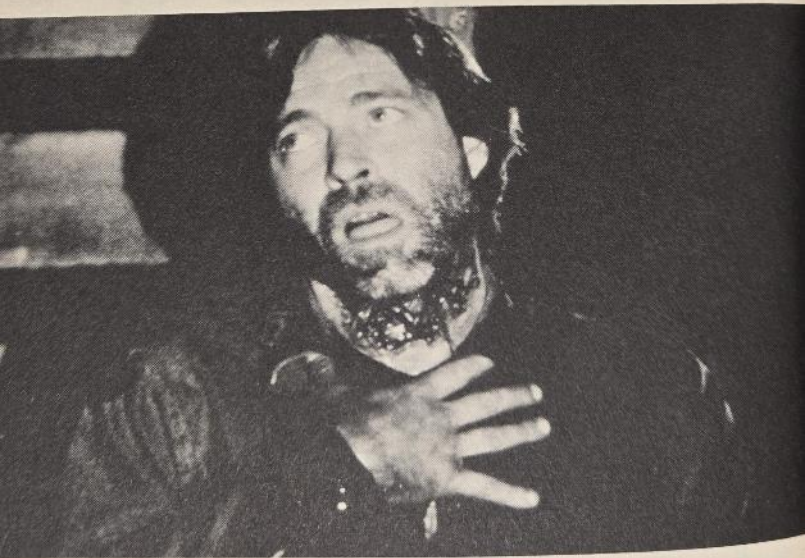
「いやだ。俺はいやだ。奴らになりたくない……殺せ、殺してくれ。」

兵士は必死にスティールに訴えていた。

柄に似合わずスティールは悲しみに耐えていた。なにしろ、自分が仲間を殺してしまったのだから。

スティールは、どうしようもなく機銃の引き金を引いた。ふたたびこの生き地獄にもどらぬよう、頭を吹き飛ばすのがせめてもの餞別だった。

腕を食いちぎられ、噴きだす血をあたりにまきちらしながら半狂乱のミゲルが走ってい

DAY OF THE DEAD

たのは、ジョンやマックダーモットが住んでいる〝リッツ・ホテル〟の近くだった。

サラがやっとのことでミゲルに追いついたが、捕まえようとしても手に負えなかった。

外の騒ぎを聞きつけて、ジョンが二人のもとへ駆けつけた。サラはジョンとミゲルがもみ合っているうちに、後ろへまわって大きな石を拾い、ミゲルの後頭部を殴打し、昏倒させた。そうでもしなければおとなしくなりそうになかったからだ。

ジョンとサラはミゲルを地面に寝かした。彼女がジョンの足に収まっている蛮刀を抜いたとき、彼には一瞬、彼女の真意がはかりかねた。

しかし、つぎの瞬間すべてを納得した。彼女はこともなげに、昏倒したミゲルの左腕をその蛮刀で切断し、死が伝染するのを防いだのだ。

つぎに彼女は着ていたシャツを脱ぎはじめた。ただでさえギョロギョロした目をぎょろつかせて様子を見ていたマックダーモットは、彼女がなにをしようとしているのかすぐに察して、キャビンの外に置いてあるガソリン缶を持ってきた。

彼女は破いたシャツを棒きれに巻きつけ、マックダーモットの持ってきたガソリンをそれに振りかけると、火をつけた。

シャツの巻かれた棒きれは青白い炎を出して燃えだした。

サラはそれを持ってミゲルのそばにしゃがむと、急造の松明でミゲルの傷口を焼きはじ

めた。羊の肉を焼いたときのように香ばしい臭いの煙がもくもくと上がった。ジョンとマックダーモットがミゲルをとりおさえている。

気を失っていたミゲルが意識をとりもどすと同時に、死人さえ墓場から呼び戻すようなこの世のものともつかない悲鳴をあげた。

ウアーッ！

その悲鳴で呼びもどされたのは死人ではなく、武装したローズ大尉とスティールとリクルズの三人だった。彼らはミゲルを奪いにきたのだ。

「そこをどくんだ、どかないとこれを見舞うぞ！」

スティールはそういうとサラに銃口を向けた。思わず立ち上がり、操縦士のジョンもピストルを抜く。彼らが来たことをいち早く察知したマックダーモットは自動小銃をとりにキャビンの中に入っており、ドアをたてにして銃をかまえていた。

ジョンがピストルを抜いたのと同時に、ローズ大尉がジョンに銃口を向けていた。

おびえきったサラは必死に弁解した。

「かまれた腕は切断したのよ。感染はしてないわ。」

「してたらどうするんだ？」

と、スティールがいった。

「そのときはわたしが撃ち殺すわ。」
「そのスペイン野郎のせいで、そのばか野郎のおかげでこんなことになったんだ。どかないとおまえも撃ち殺すぞ。」
ジョンがスティールをギラギラと睨めつけながらいった。
「癖になっちまうぜ、銃を向け合うのがな。」
「そのアホンダラのおかげで仲間が二人死んだんだ。」
「こっちだって腕を失くした奴がいる。」
「そいつは奴らにかまれた。殺さなくちゃならんぜ。」
「うまく予防はしといたわ。」
と、サラがいった。
「だめだな。俺はこんなのは山ほど見てきた

が、奴は死ぬよ。」
　スティールのかわりに隊長のローズがそういった。
「死んだらわたしが始末するわよ。」
「そんときはおまえがやられるときだ。まだ奴と寝たいのか？　宿舎にはぜったいに入れんぞ。」
　ジョンが助けぶねを出した。
「俺たちがめんどうをみるさ。」
「生かしちゃおけんですぜ。大尉。」
と、血気にはやるスティールをおさえて、ローズはこういった。
「殺すのが情けってもんだ。こいつは死んで化け物になりたいと思うか。考えてみろ、おまえらみんなだ。いいか、よく聞け、もう金輪際おまえらにゃ協力せんからな。明日、囲

いの中のクソどもをぜんぶ始末してやる。」

　そういうとローズとリクルズはきびすを返した。しかし、スティールはまだ銃を向けたままそこに立っていた。ローズは振り返っていった。

「いくぞ、スティール。来い、そいつらにかまうんじゃない。」

　なかなかあきらめきれないスティールは、いまにも銃をぶっ放しそうだった。マックダーモットも指を引き金から離さなかった。

「覚えてやがれ。」

　しばらくすると、スティールはローズたちのあとについてすごすごと引きあげていった。

　ぶるぶると青い炎が震えていた。ミゲルのそばにひざまずいたままのサラは、まだ松明（たいまつ）を持ったままで、彼女の震えにしたがって、その青い炎が揺れていたのだ。

　ジョンはすぐに彼女の手から松明をとって近くへほうり投げると、ひざまずいて彼女に手を貸して立たせてやった。

「ありがと。」

「さあ、ミゲルを中に入れよう、動かせるか？」

「たぶん……。」

そのときだ、サラはいままでこらえてきたものがきゅうにこみあげてきて、ジョンに抱きついた。彼女は父親のようなやさしいジョンの肩の中で子供のように泣いた。

恋人のミゲルは彼女のことを強い女だといっていた。そうじゃない、弱い女ほど強く見え、強い女ほど弱く見えるのだ。

「泣くな。」

ジョンは子供をあやすようにいって、彼女を連れて〝リッツ・ホテル〟の中に入っていった。

キャビンの中にミゲルを運び、ソファー・ベッドの中にとりあえず寝かしつけた三人は、モルヒネなどの医薬品を宿舎(コンパウンド)に取りにいくことにした。

ローズやスティールたちがなにをするかわからないので、いちおう彼女にはマックダーモットが護衛についていくことになり、ジョンはここにのこってミゲルの身柄を守ることにした。

銃をたずさえた二人がキャビンを出ようとしたとき、ジョンはサラにいった。

「ミゲルは死ぬかもしれんぞ。」

「ええ。でも、やることだけは……。」

「俺が見てるよ。気をつけろよ、30分でもどらねば探しにいくからな。」
「だいじょうぶよ。」
「ちゃんともどってくるさ。」
と最後にいったマックダーモット、そしてサラの姿を見送りながら、ジョンはドアのところで銃を持って見張りに立った。

9　四面楚歌

武装して宿舎の区域にうまく忍びこんだサラとマックダーモットの二人は、まずいくつもある博士の実験室の一つに行き、モルヒネやその他の医薬品をポケットにつっこめるだけつっこんだ。

「こいつはひでえ、奴は遊んでんのか。」

実験室に転がっている腐乱した人間の臓器や半分ミイラ化した屍体を見て、マックダーモットは思わずいった。それは写真集でしか見たことのないナチスドイツの人体解剖、人体実験さながらの光景だった。

「まあ、遊びみたいなものね。」

いささか心がまえができていたサラがそういったとき、マックダーモットはそばの台にかかっていた白い布をはいだ。その白い布の下でなにかがうごめいていたからだ。

サラもマックダーモットも我が目を疑った。

それは人間の首だった。その首はなにかを叫ぼうとしているのか、必死に口を動かしていた。

二人はそのことに驚いたのではなかった。

その首は、さっきスティールにとどめをさしてもらい、死んだはずの兵士の首だったのだ。

これもゾンビ化してしまったのだろうか?

サラは思わず腰のピストルを抜いて、撃ち殺そうとした。それがまだ生きていればの話だが——。

マックダーモットはあわてて彼女をとめた。

「よせ、奴らが飛んでくるぞ。ほうっておけ。こんなところは出るんだ。」

二人が実験室から廊下に出たとき、バブを飼っている部屋の鍵をあけて、博士が中に入っていくのが見えた。

サラとマックダーモットは、その部屋がのぞけるようになっているブースのほうに忍び足で入り、暗がりの中から博士とバブの様子を見ていた。

博士は、まずバブにヘッドホンをつけて、なにか音楽を聞かせていた。静かな部屋でちりちりと音をたてるヘッドホンからもれてくる音楽はベートーベンの第九の、あの有名な

「歓喜の歌」だった。
　サラは思った。この歌は生の歓びを歌った歌ではない、死の歓びを鼓舞する音楽なのだと——。得体の知れない戦慄が彼女の全身に走った。
　しばらくすると、博士はバブの前で血のべっとりとついた人差し指を立て、スイッチを切った。
　ウーウーとうなって、バブはまた音楽をせがむ。
　博士は自分でスイッチを押すのだと合図する。
　するとどうだ、バブは音楽が聞きたさに、そのスイッチを自分で押したのだ。
「さあ、ほうびをあげよう。とてもおいしいぞ。」
　博士はそういって、バケツの中に入ったほうびをバブに与えた。
　バブはがつがつとむさぼるように、そのほうびにかぶりついた。それは大きな牛の肩の骨のように見えた。
　別室でその様子を見ていたマックダーモットは、顔をひきつらせながらつぶやいた。
「あれは、なんなんだ？」
　サラには察しがついていた。あれはさっきべつの部屋で首だけの死体を見た兵士の、のこりの死体だったのだ。

「まさか、そんなバカな……。」
といったサラの口を後ろからふさいだのはローズ大尉の手だった。スティールやリクルズも小銃を持ってそこに立っていた。
兵士たちは銃を向けながら博士のいる部屋に、二人を連れて入っていった。
「いま、なにをやった、フランケン？」
と、ローズ大尉は博士にも銃を向けながら詰め寄った。
不意をつかれた博士には返す言葉はなかった。
やがて博士はいくつもある研究室をつぎつぎにひっぱりまわされた。なにか証拠になるものを兵士たちは探そうというのだ。ローズたちが大きな冷蔵庫のある部屋に博士を連れてきたとき、すべては文字どおり氷解した。冷凍室の中には、首こそなくなっていたが、軍服を着た兵士の首なし死体が転がっていたのだ。
博士は懸命に弁解した。兵士の姿を隠そうと冷凍室のドアに両手をかけ、弁解した。
「聞いてくれ、大尉！　聞いてくれ！」
「この音でも聞け！」
大尉はそういうと、機関銃をぶっぱなした。
博士は撃たれながらも仁王立ちになり、何十発という弾丸を腹に受けた。

DAY OF THE DEAD

博士はまもなく倒れこみ、そしてこと切れた。
「銃をとりあげろ。奴らの銃をぜんぶだ！　俺の部下たちを！　よくも、俺の部下を！」
スティールらは拉致したサラとマックダーモットの腰のものをとりあげた。
そこへ、銃声を聞きつけて、あわてて科学者のテッドが入ってきた。彼も兵士らにすぐに拉致された。
30分経っても二人がもどってこないので、ジョンはキャビンの中でやきもきしていた。彼が決心して外へ出たとき、サラとマックダーモットとテッドの三人を拉致した兵士たちがやってきた。
ローズは銃を向けているジョンにいった。
「動くな！　フランケンは死んだ。銃を捨てんと、こいつも殺すぞ！」
ローズはテッドのこめかみに銃口を向けながらいった。
「本気だ。俺は博士を撃ち殺したよ。あの殺戮者をな。あいつは人でなしだ。こっちへこい。さもないとこいつらを一人ずつブッ殺すぞ。」
ジョンはしかたなく肩にかけた自動小銃も、手に持ったピストルもローズの足元に投げた。

ローズは目ざとく部下の兵士にいった。
「奴の刀も取れ。」
兵士はジョンの足についている鞘（さや）から蛮刀を取った。
そのときだ。ローズはテッドの頭を無慈悲にピストルで撃ち抜いた。驚いたジョンはローズに飛びかかろうとした。しかし、ローズの銃口がしっかりとジョンに向けられていたのだ。
泣き叫ぶサラ。
「俺たちはここからズラかる。ナメたマネをしたら撃ち殺すぞ。」
と、ローズはジョンをにらみつけながらいった。
ジョンは食ってかかった。
「ヘリには全員は乗れないぞ。」
「ふふ、ぜんぶは行かんさ。俺と部下とおまえだけだ。」
「断る。」
「リクルズ、オリを開けて、そいつらを入れろ。」
ローズがそういうと、リクルズはすこし奥に行ったところにある牧場の木柵（もくさく）を開けた。
「やめて！　お願い！」

暴れるサラとマックダーモットをスティールがおさえながら、リクルズは二人を木柵の中に入れた。
ジョンが叫んだ。
「ローズ、やめろ。おまえたちをどこへでも連れていくから。」
ローズは薄笑いを浮かべながらいう。
「おまえのいったとおり、どうせヘリにはぜんぶは乗れんのさ。」
「ローズ、やめろ！　ヘリを飛ばさんぞ。俺も殺すんだな。二人を出せ、取引だ。」
「取引は俺が決める。おまえじゃない、いいな？」
ローズはそういうと、木柵の内側の扉を持ちあげる縄に手をかけ、ひっぱりあげて檻(おり)を開けた。

サラとマックダーモットの二人は、もう外には出られなかった、出るなら中に出るしかなかった。二人は完全に死の牧場に閉じこめられたのである。
さっそく、生の臭いを嗅ぎつけて、何十人というリビング・デッドたちがつぎつぎと木柵のほうに近づきつつあった。
サラとマックダーモットは覚悟を決めた。
このまま奴らが近づくのを指をくわえて見て、木柵の中で殺されるのを待つよりも、この鬼畜の森に飛びこんで、逃げまわるほうがまだ得策だと本能的に察知したのだ。
「奥に古いサイロがあったんじゃなかった？」
と、サラがいった。
マックダーモットはまた小さな容器を出し、酒をあおりながらいった。
「銃なしじゃ、とても行けんよ。」
「このままじゃ、八つ裂きにされるだけよ。」
そういうと、二人は走りだした。
マックダーモットは木柵から材木をとりだし、走った。
ゾンビたちに対抗できるものは、とりあえず二人の〝早さ〟だったのだ。
一人のこされたジョンは、兵士の一人が指し向けたライフルを奪おうとしてもみあっ

た。その拍子にジョンはその兵士をのしたが、すぐにスティールたちがもどって銃口を向けた。そしてローズがいった。

「そいつは撃つなよ、スティール。まだ使いみちがあるんだからな。ヤキを入れてやれ。すこしはりこうになるだろう。」

スティールは間髪を入れず、ジョンのみぞおちをしたたかに殴った。ジョンがうっとなってかがむと、スティールはかまわず二発、三発とジョンの顔面を殴打した。

ジョンがついに地面に倒れこんだとき、ゴーッという大きな機械音がどこからか聞こえてきた。

スティールが手を休めて叫んだ。

「なんてこった、エレベーターだぞ！」

「調べるんだ。」

とローズがいうと、スティールとリクルズがエレベーターのある宿舎のほうにすっとんでいった。

エレベーターを動かしていたのは、けがをして寝こんでいたはずのあのミゲルだった。

彼はゾンビに追いつめられたら……という強迫観念にさいなまれ、常日ごろからノイローゼぎみだった。その強迫観念を追いはらう方法──それはいっそのこと、ゾンビをこの地下に引き入れ、放つことだった。

なんときちがいじみた考えだろう？　しかし、しかたがないのだ、半分気がくるっていたのだから。

ミゲルは左腕の痛みをこらえながら、巨大なエレベーターの真ん中に立ち、リモコン装置でスイッチを入れ、地上に上がった。

そして彼は金網のフェンスのほうへ行き、入り口の鍵を開けたのだ。もちろん、何百人というゾンビたちがロック・コンサートに殺倒する若者のように、入り口で待ちかまえていた。

やがて、ミゲルが鍵を開けると、ゾンビたちはミゲルのあとを追って、我がちに中に入ってきた。

一方、ゾンビたちのうようよいる地下牧場に放牧されたサラとマックダーモットは、薄暗い地下道を懸命に走りまわっていた。

とにかく二人には武器らしい武器がないのだ。

きた。

サラが足元に見つけたスコップを拾おうとしたとき、突然、地面からにゅっと手が出てきた。

キャーッ！

あわててはねのいたサラは、後ろから近づいてきたゾンビに背後から羽交(はが)い締めにされた。

気づいたマックダーモットが、スコップをすぐに持ちあげ、サラをつかまえているゾンビの顔めがけてスコップを振りおろした。

そのゾンビは地面に倒れた。

マックダーモットが振りおろしたスコップの鋭い刃先が、地面に倒れたゾンビの顔のど真ん中に突きささり、顔を半分にした。

グギグギッ！

マックダーモットがさらに力を入れて、スコップを地面にねじこむと、ゾンビの顔は真っ二つに割れ、彼がスコップを抜いたとき、半分にちぎれたゾンビの顔の上半分が汚れたサッカー・ボールのごとく地面をころころと転がった。

なおもべつのゾンビが彼に襲いかかろうとしていた。サラはマックダーモットが持っていた材木で、そのゾンビの頭を思いきりぶったたいた。

バスッ！
鈍い音を立てて、ゾンビの頭が真っ二つに裂けた。二人はあわてて向きを変え、さらに奥のほうへ走っていった。
二人がいるところは大きな岩の突きでた行きどまりだった。二人の居場所を探していた。
地面に転がったゾンビの半分の顔が、目をぎょろぎょろさせ、二人の居場所を探している。しかも、南米にしかいないはずの吸血コウモリが、ギャーッギャーッという声を出して、二人の跡を追っていた。
彼女にはわかっていた。かつてこのコウモリの血を採血して調べたのだが、彼らは狂犬病の細菌におかされていたのだ——。
懸命に走る彼女の脳裡にはそんなことがよぎっていた。
実験室で鎖につながれていたゾンビの出世頭〝バブ〟が、ぽつんと一人部屋にとりのこされ、鎖をもてあそんでいた。そのうちに、鎖が留め金から外れてしまったのである。バブはきょとんとしていた。
自由になったバブは、やがて、博士を探しに宿舎の中をうろつきはじめた。まるでフランケンシュタインがフランケンシュタイン博士を探し求めるように——。

皮肉なことにバブは、博士が死んだ後になって、飼い馴らされるようになっていたのだ。
エレベーターのスイッチがある部屋にスティールとリクルズの二人が駆けつけたとき、エレベーターはすでに地上に上がっていた。
しかも、ヒューズ・ボックスの隣にあるエレベーターの配電盤はミゲルによって滅茶苦茶に壊されていた。
スティールがあたりにある物をけとばしながらどなった。
「誰かが壊しやがった。もう一つのコントロールはエレベーターの上にしかねえ。リクルズ、もう俺たちは出られんぞ！」
リクルズがパニックになっていった。
「直せよ、直せんのか！」
「あの野郎だ、あのスペイン野郎だ！」
「直せ、直せってば。早く、早く。」
「バカヤロ！　なにを直せってんだ！　あの野郎が操作盤をぶっ壊しちまったんだぞ。」
「直せるだろ。」
二人はどうしていいかわからず押し問答を繰り返した。

したたかに殴られた操縦士のジョンは地面の上にまだ倒れていた。
ローズはそばで同じように倒れていた兵士の一人を足でひっくりかえしたが、その瞬間、ジョンに向けていた銃口を一瞬そらした。
その刹那、ジョンはローズ大尉に飛びかかり、思いきりあごをしゃくり上げて殴った。
もう一人の兵士とともにローズはあっけなく昏倒し、そのすきにジョンはローズの二丁のピストル、機銃など、できるだけの武器を持って、自ら牧場の木柵を開けると中へ駆けこんでいった。
ウオーッという不気味な声が牧場の中でこだましていた。
ジョンは近づいてきたゾンビの頭を狙うと、一発で頭を吹き飛ばした。
彼は幸先がいいなと思ったが、同時にこうも思った。
（気をつけなければいけない。こんな薄暗い中では、ゾンビたちとまちがえて二人を撃ってしまうかもしれない。
いや、それればかりではない。もしも二人にまちがわれたら、自分の命も危ういのだ。どうせ、二人は武器を持っていないとタカをくくるのもいいだろう。しかし、この足元にある大きな石だって、岩陰に隠れて背後から襲われたらひとたまりもないのだ。
気をつけねば、あせらぬように気をつけねば……。）

ジョンがゾンビを撃った銃声がサラたちの耳にも入っていた。
「ジョン！」
サラが後ろに向かって叫んだが、いまさら二人は後もどりするわけにはいかなかった。
すこしでも前進し、かすかな脱出の可能性に賭けねばならなかったからだ。
その間にも、マックダーモットの背後から顔のくずれたゾンビが手をつかんで来た。
マックダーモットがスコップでそのゾンビの頭を力のかぎりにひっぱたくと、ゾンビは白い粘液を出しながら地面に倒れた。
二人はなおも前進しつづけた。
ジョンはピストルに弾丸をこめた。
そのとき、サラたちが近づいてきた。
いや、そうではない。それは二体のゾンビだったのだ。
ジョンはあわてて弾丸をこめようとするが、ゾンビもそれ以上の早さで近づいてくる。
銃はあきらめて、とりあえず逃げるべきかジョンは迷った。
と、銃に弾丸が入った。
ジョンはそのゾンビたちの顔めがけて撃った。一発。二発。二発ともみごと、ゾンビのこめかみに命中した。

しかし、近くの非常用の赤ランプがすこし離れた岩陰から近づいてくるゾンビの集団を、また照らしだしていた。

ジョンは奥に向かって一目散に走りだした。

ジョンに殴られ気を失っていたローズはやがて目を覚まし、銃が奪われていることに気づいた。もう一人の兵士も同じように銃を奪われていた。

二人はとりあえず、スティールとリクルズのいるエレベーターのところに駆けつけた。

「どうした？」

と、現場に駆けつけたローズが聞くと、スティールが答えた。

「あのスペイン野郎が操作盤を壊しちまいやがったんです。」

「あの野郎、ついに逃げやがったか。」

ローズがそういったとき、ウィーンという音を立てて、エレベーターが降りはじめた。しめたという顔でスティールがそれを見上げると、その顔がみるみるうちに恐怖でゆがんだ。

エレベーターに乗っていたのは、ゾンビたちに食いちぎられたミゲルだけでなく、トラック二台分、つまり百人近くのゾンビ軍団だったのだ。

「なんてこった！」
スティールがそういって廊下のほうに逃げると、一台しかないカートがとっくに動きだしていた。隊長ともあろうローズがスティールとリクルズ、そしてもう一人の兵士を置きざりにして、一人で逃げだしていたのだ。
「ローズ、待ちやがれ！　ローズ！」
しかし、ローズを乗せたカートはぐんぐん宿舎の奥に向かっていた。
うろつきまわっていたバブが博士をついに見つけだしていた。しかし、それは生きた博士ではなく、蜂の巣になり、変わり果てた博士の姿だった。
ウーッ、ウーッ！
バブは父親を失った子供のように博士の姿を見て、うなり声をあげた。
忘れかけていた憎しみの表情がバブの顔に蘇り、背筋の寒くなるような冷たい光が目に宿った。
ふと、バブは足元の物に気づいた。
それは兵士たちが落としていった拳銃だった。
バブは探していたオモチャを手にとるように、それを大事そうに拾いあげると、また

ウーッとうなり声をあげた。

カートに乗ったローズは、こんなときに道に迷っていた。迷路のようなこの地下基地は、実際、馴れた人間でも道に迷うほど広かった。

いつのまにかあふれていたゾンビが、ローズの前に立ちはだかっていた。ローズはスピードを出したカートでそれをはねては、前に進んだ。

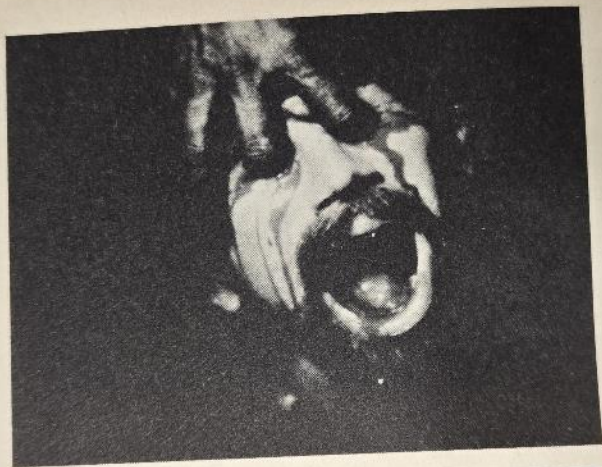
彼の乗ったカートが宿舎の入り口に着くと、彼は急いでドアを開け、それに中から鍵をかけた。まだスティールたちが中に入っていないのにだ。

最初の犠牲者はトレスという兵士の一人だった。

群がるゾンビたちが彼の体を八つ裂きにしていた。

それを見たリクルズが機関銃をぶっ放し、奴(やつ)らをけちらそうとしたとき、また餌食になった。逃げ遅れた彼は迫りくるゾンビたちの前で、げらげらと大声で笑いだした。ついに気がふれたリクルズは、飲んだくれたパーティー客のようにぐるぐるとまわりながらゾンビに囲まれていた。やがてその笑い声が叫び声に変わった。

取りかこんだゾンビたちが、リクルズの顔といわず足といわず、四方八方からひっぱりはじめた。

頭皮をつかんだゾンビが思いきりひっぱると、ただでさえひきつっていた顔がさらにひ

きつれ、眼球が露出し、唇がめくれ、そして腹わたが噴きだしたかと思うと、生きたまま下半身が上半身と切断された。

それでもまだ叫び声をあげているリクルズの顔についた白い目が、自分の体をなつかしむように下半身の行方を見守っていた。

スティールは宿舎のドアの前で、近づいてくるゾンビどもに機銃を掃射していた。つぎつぎと倒れるゾンビ。しかし、弾丸が命中する数は限られていた。あとからあとから、またべつのゾンビ軍団が近づいてくる。

「ローズ！　ドアを開けろ、クソッタレ！」

たまらずスティールは、ドアの鍵をめがけて機関銃をぶっ放した。

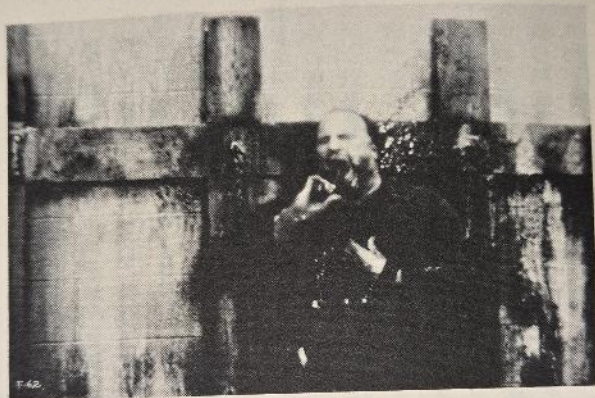
スティールは中に入ることに成功したが、中に入ることに成功したのはゾンビたちも同じだった。

廊下を走っているうちに、スティールは銃を持ったバブと鉢合わせになった。

と、バブはいきなり撃ってきた。

かろうじてよけたスティールは、廊下の手前の部屋に逃げこみ、様子をうかがった。

すると、部屋の前を横切るバブの影がドアの窓に映った。

「ノータリンが……撃ち方がわかるのかよ。俺が教えてやるぜ、ウスノロ。」

そういってスティールが銃の引き金を引こうとしたとき、べつのドアが開いてゾンビたちが中に入ってきた。

スティールは、一体、そして一体と、しとめた。が、そのあとからあとから、べつのゾンビたちが部屋に押し寄せてきた。

とっさにスティールは考えた。

このまま、弾がなくなるまで撃ちつづけるべきか、それとも最後のために一発のこしておくべきか……。

スティールは観念した。

彼は部屋の奥に行ってしゃがむと、壁に寄りかかりながら銃口を口の中に入れた。

引き金に当てた指が動くと、スティールの後頭部は吹き飛び、彼は一瞬のうちに絶命した。皮肉なことに、彼が死を選んだその場所

は、ゾンビの標本を鎖でつないでいたその場所だった。

地下牧場では、ジョンがサラたちに追いついて、合流していた。

ジョンはサラとマックダーモットにそれぞれ銃を渡すと、近づいてきた数人のゾンビの頭を吹き飛ばした。

機関銃を手にした二人も、べつのゾンビ数体を撃退した。

サラは、相手が女のゾンビであろうが、もはや頓着していなかった。撃たれた女ゾンビは脳みそを噴水のように吹きだしながら倒れた。

「赤い電気のほうよ。」

サラがそういうと、一行はいまは使われていないミサイルのサイロの中に入った。

ミサイルのサイロといっても、もうミサイルは格納されていなかった。

かつて、ここに置かれていた核ミサイルは、カンサス全州を壊滅状態に陥れたという話だった。あまりに増えたリビング・デッドたちを葬るために、このミサイルは自国の一州に向けて発射されたのだ。しかし、それは悪循環を生んだだけだった。

核の熱波で焼けただれたカンサス住民の死体は、死霊に呼び覚まされ、いたずらにゾンビの数を増やしただけだった。

ただ、わからないのは、それがどうしてカンサスなどという片田舎に向けられたかということだった。

サラたちはサイロのエレベーターを使って地上に上がろうとしたが、それは壊れていた。操作板が壊されていたためではなく、そのまえにすでに使用不能になっていたのだ。

一行は、目のくらむような長くてせまい階段を、一段一段、昇っていくことに決めた。最後にジョンが昇っていこうとしたとき、ゾンビがジョンの足につかみかかった。すぐに彼が銃を撃つと、弾丸は灰色の顔をしたそのゾンビの胸に命中した。

そのゾンビがひるんだ瞬間、ジョンは階段を昇ったが、四、五段昇ったとき、またべつのゾンビに足をつかまれてしまった。

同じように銃を撃とうとしたが、銃にはもう弾丸が入っていなかった。そのゾンビがジョンの足に嚙じりつこうとした瞬間、上にいたマックダーモットの銃口が火を吹いた。

ゾンビは階段から転げ落ちた。

「さあ、行こう、ジョン。楽園に連れてってくれよ。あてにしてるぜ。」

マックダーモットがそういうと、ジョンは長い階段を見上げながら、必死で階段を昇った――。

10　約束の地

隊長のローズは銃をとりに兵器庫に行っていた。並んでいる中から機関銃一丁を素早くつかみ、廊下に出たとき、ローズは肩に強い衝撃を覚えた。

見ると、廊下の奥で銃を撃ったバブが、仁王立ちになっていたのだ。

「クソ！」

ローズはまだ弾倉（クリップ）を装塡（そうてん）していなかった。

肩に激痛が走った。しかも、右のきき手なのだ。

こんなところで、あんなクソッタレにやられてたまるか！

ローズは廊下の角を曲がって逃げた。

その角を曲がった瞬間、またバブの撃った弾丸が左の太股に当たった。

アアアア！

ローズは機関銃にクリップを装塡しようとしたが、クリップはバブの射程内のすこし離

れたところに落ちていた。
（あれを取りにいけば、やられる……。）
ローズは足を引きずりながら、廊下を走った。そして、そばの部屋に入ろうと、鍵をがちゃがちゃと回したが、一向に開きそうになかった。
「畜生、畜生！」
ローズは、今度は突き当たりのドアを開けに足を引きずった。
そのとき、バブが角を曲がって姿を現した。
ローズが突き当たりのドアを開けたとき、彼の顔は骨壺のように真っ白になった。
そこには大挙したゾンビたちが待ちかまえていたのだ。
ウアアアアアーッ！
ローズが振り返ったとき、彼のどてっ腹にバブの撃った弾丸が命中した。
口を開けたまま、痛みというよりも驚きに耐えているローズの体を、後ろから伸びたゾンビたちの手がつかまえた。
倒れかかっているローズに廊下の奥からバブが送ったのは、とどめの一発ではなく、はなむけの敬礼だった。博士を殺した隊長への復讐はこうして完遂された。ゾンビを飼い馴らすという博士の念願の研究は、こうして皮肉な形で完成されたのだ。

ローズの体に群がるゾンビたちが、彼の体を八つ裂きにしはじめた。

納得がいかない表情のままこときれたローズの顔は、自分の下半身がひきちぎられ、血みどろになって廊下をひきずられていくのを、「それは俺のものだ」といわぬばかりに見ていた。

地下基地の中には死があふれていた。

ゾンビたちが新鮮な死体を奪い合い、まさに骨肉相食(あいは)んでいた。

血みどろになった内臓を白い廊下の上で引きずりながら、金網にもつれた大腸にかぶりつきながら、血の海をすすりながら、血みどろになった太股の関節をしゃぶりながら、彼らは生温かい生を賞味していた。

ミサイルのサイロを伝って地上に出たサラ、ジョン、マックダーモットの三人は、ぎゃくに基地外の敷地に出ていたので、門の鍵を開けて、中のヘリのほうへ行こうとした。

サラは、ヘリのほうを見たが、ゾンビたちがそこにすこしずつ近づいていた。

「燃料が入っていればいいが……。」

と、ジョンがいった。

サラは、燃料を入れないでジョンともめたことを思い出し、自分の浅はかさを責

めた。
こんなことになるなら、燃料を入れるななんていわなければよかった……。
「早くしろ。」
ジョンにせっつかれたサラは、鍵を急いで開けた。
ゾンビがヘりに近づくスピードと、自分たちがヘりに近づくスピードとの勝負だった。
三人は懸命に走った。
銃がこんなに重いと感じたことはないと思いながら、サラは懸命に走った。
どうにか三人がヘりのところまで来て、コックピットのドアを開けたとき、いつか夢で見たような黒い手が中からヌーッと伸びた——。

と、そこでサラは我に返った。
これは夢なのだろうか？
いや、そうではない。
手をかざしてまぶしい光をさえぎりながら、よく見ると、海岸線でジョンとマックダーモットがたわむれていた。
しかも、自分がまどろんでいたすぐそばには、たしかに〝40—アルファ号〟が鎮座して

いたのだ。
ついに、我々はあの地獄から脱出し、この南海の孤島に逃げのびてきたのだ。
そうだ、疲れたあまり、自分は砂の上でまどろんでいたのだ。そうだ、そうにちがいない――。
青空、青い海、白い砂、ここちよい汐風、なにもかもがまるで夢のように彼女には思えた。
彼女は真新しい十一月のカレンダーの、四つめの空白に×印を入れ、過ぎ去った一日のことを思った。
こうして、一日（ザ・デイ）は終わりを告げたが、また新たなる災厄が始まらぬよう願いつつ、サラはジョンとマックダーモットの二人の頭上に舞っているカモメたちの姿を、うつろな目でいつまでも見つめていた。
ただ、沖合いに見える一艘（そう）の船がこちらに近づいていることにサラも他の二人も気がつかなかった……。

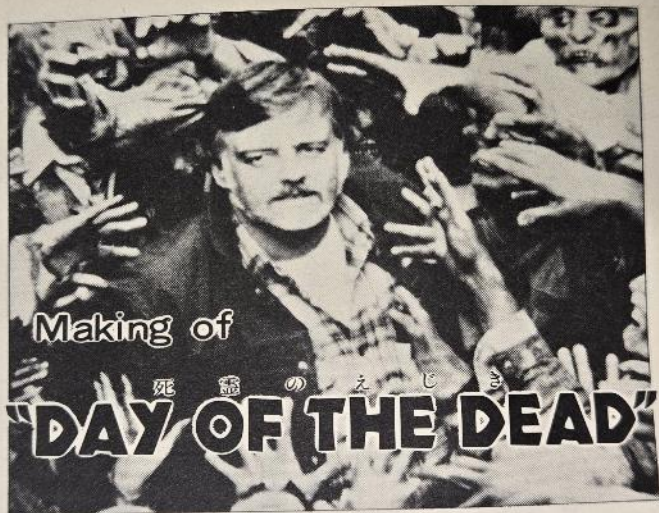
死霊のえじき　完

悪夢のような一日は終わりを告げた。逃げのびた3人の平和は，いつまで続くだろうか？

STAFF

Executive Producer··················SALAH M. HASSANEIN
Producer····························RICHARD P. RUBINSTEIN
Directed and Written by···············GEORGE A. ROMERO
Director of Photography················MICHAEL GORNICK
Special Make-Up Effects························TOM SAVINI
Production Designer·····················CLETUS ANDERSON
Original Music·····························JOHN HARRISON
Art Director····································BRUCE MILLER
Production Manager··························ZILLA CLINTON
Editor···PASQUALE BUBA
Costume Designer····················BARBARA ANDERSON
Casting·····················CHRISTINE FORREST ROMERO
Special Effects·····························STEVE KIRSHOFF
MARK MANN
Weapons···JOHN WOLCUT
Zombie Background Masks························T H S, INC.
DAVID SMITH
TERRY PRINCE

CAST

Sarah··LORI CARDILLE
John······································TERRY ALEXANDER
Rhodes··JOSEPH PILATO
McDermott································JARLATH CONROY
Miguel···································ANTONE DILEO Jr.
Steele································GARY HOWARD KLAR
Rickles····································RALPH MARRERO
Fisher···JOHN AMPLAS
Dr.Logan·································RICHARD LIBERTY
Bub······································HOWARD SHERMAN
PHILLIP G. KELLAMS
TASO N. STAVRAKIS
GREGORY NICOTERO

映画評論家

村岡　三郎

"キング・オブ・ホラー" ジョージ・A・ロメロ
ロメロ・プロジェクトをささえる人々
"特殊メイクの神様" トム・サビーニ
プロダクション・ノート
ホラームービーに大スターはいらない

〃キング・オブ・ホラー〃

ジョージ・A・ロメロ

ロケ現場のロメロのスナップなどを見ていると、ずいぶんと頼もしい感じだ。体が大きいだけではなく、表情、とくに目がそう思わせる。ひと言でいえば包容力。握手をすると、大きな手からあたたかみがジーンと伝わってくるような人、そんな気がする。
つまり、血だらけの残酷恐怖映画をつくっている人には見えないのだ。しかし、このギャップは、ロメロにとってはプラスだろう。異常っぽい人が異常な残酷映画をつくったらやはりコワイ。ロメロはその正反対だ。
ロメロの映画はただコワイだけのスプラッターではない、と支持しているファンたちの熱心さは、ロメロ信者とまでいわれるくらいにすさまじいものらしい。
〃キング・オブ・ホラー〃といわれるロメロだが、この栄光の呼び名には、表面だけの意味よりもっと深いものがあるようにさえ思う。

いまに、新たな呼び名が必要になるのではないか、と期待するのは考えすぎだろうか。

1940年（39年という説もある）、ロメロはアメリカのニューヨーク市ブロンクスで生まれた。父親の仕事はグラフィック関係。劇場からの注文をうけ、宣伝材料を作ることがおもだった。ロメロのホラー映像におけるグラフィック的な才能は、父から受けついだものだろう。

カトリック系の家庭だったので、幼稚園を終えたロメロは教区付属の小学校に入学し、さらにセント・ヘレナのハイスクールに進んだ。

ロメロが多感な少年期をすごした50年代、子供の世界では残酷恐怖漫画〝ECホラー・コミックス〟が全盛をきわめていた。ロメロはそのコミックスの熱烈なファンになり、14歳のときには近所のこどもたちと8ミリ映画を撮った。タイトルは『惑星から来た男』。ビルの屋上から燃えている人形を落として残酷シーンを撮り、警察にみつかって大目玉をくらったというエピソードもある。しかし、一方、〝ECホラー・コミックス〟は、大人たちの手で廃刊に追いこまれてしまった。

ピッツバーグのカーネギー・メロン大学に進んだロメロは美術とデザインを専攻しながら、映画制作にも取り組むようになった。さらに絵画、演劇にも夢中になり、学校内の放

送局でも大活躍する。

つまり、なにかクリエーティブなことをしたかったのだ。だが、このころのロメロは映画監督になろう、とは思っていなかったという。映画は大好きだったが、

〝映画はカリフォルニアでひよっ子どもが集まって作るものさ。〟

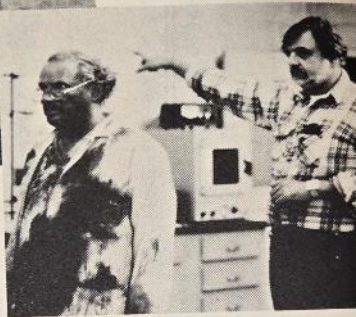
と思いこんでちょっぴり軽蔑していたからだ。だがある日、大学の教授が彼の映画制作の才能を認めてくれたことからロメロの考えも変わってきた。なにもハリウッドに行かなくても映画は作れる。それも、そのほうが自分の好きな映画を自由に撮れることに気づいたからである。

61年、文学士を得たロメロは大学を卒業、ピッツバーグのTV局にカメラマンとして就職。一年後にはラテント・イメージ・プロという広告制作会社を設立してTV局をやめた。ピッツバーグは、若者が新しいことをやりやすい土地柄だったらしい。

彼はCMや産業映画を撮りながら実力と信用と資金をたくわえていった。

67年、第1作の『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』（日本ではビデオが出ている）を監督。白黒で低予算、それがぎゃくにカルト・ムービーとしての価値を高め、いまや伝説的な作品になっている。

▲現場で，自ら製作指揮をとるロメロ。

▼仕事中の彼の目は厳しい……。

70年には恋愛映画『ゼアズ・オールウェズ・バニラ』、71年にはオカルト・コメディー『ジャックズ・ワイフ』を撮ったが、失敗。やはりホラー・ムービーに帰ることにした。『ザ・クレイジーズ』（72年。日本ではビデオで発売。TV放映タイトルは『第2のカサンドラクロス／細菌兵器に襲われた街』）は細菌汚染の恐怖というより、くるった人間たちの行動のほうがコワイ作品だった。

73年。プロデューサーのリチャード・P・ルービンスタインと出あったロメロは、ローレル・グループを設立。TVのスポーツ・ドキュメンタリーを手がける。

76年、『マーティン』（日本ではビデオ発売）を監督。神父役で出演もした。この作品

でトム・サビーニとはじめて組み、以後の成功へとつながっていく。
翌年の『ゾンビ』は、世界配給5500万ドルの大ヒット。ロメロにも〝夜明け〟がやってきたのだ。
81年の『ナイトライダーズ』は、ホラーではない。バイクに乗った旅芸人たちをじっくりと見つめた作品。翌82年の『クリープショー』は、五話からなるオムニバス・ホラー。脚本のスティーブン・キングとともに、〝ECホラー・コミックス〟への思いをこめて作った。
その後、83年にはTVのホラー・シリーズ『フロム・ザ・ダークサイド』（日本ではビデオ発売）をプロデュースする。『トリック・オア・トリート』など、脚本を書いた作品もあるが、監督はしていないようである。
そして85年に〝リビング・デッド〟シリーズの完結篇として『死霊のえじき』を撮りあげたのだ。
いま、ロメロはキングの原作『ペット・セメタリー』映画化の準備を進めているところだ。ほかにも『ザ・スタンド』『クリープショー2』『ナイトシフト』などがこれからの作品としてラインアップされている。ますます期待は高まるばかりだ。

ロメロ・プロジェクトをささえる人々

ロメロと切っても切れないのがロメロ・ファミリー。彼らはもう10年以上もいっしょに仕事をしている仲間だ。普通は作品があって、それからスタッフを集める。だが、彼らの場合は、全員がいて、はじめてロメロの映画が完成されるのだ。

彼らは多才だ。低予算を知りつくしたうえで身についたものであることはたしかだが、そのコンビネーションはみごとというよりない。そしてもうひとつ注目すべき点は、彼らがハリウッド志向をもっていないことだ。映画人ならみんなが憧れるハリウッドだが、彼らは成功してからも行こうとはしない。ピッツバーグで自分たちの作りたい映画を作ることが楽しくてしかたのない連中なのである。

ロメロ・ファミリーの母体はローレル・プロダクション。代表であり、プロデューサー

▲固いきずなで結ばれたロメロ・ファミリー。

のリチャード・P・ルービンスタインはブロンクス生まれ。プロデューサーとしての自分の才能にはやくから気づいていた。つまり、金もうけのハナがきくというわけだ。

コロムビア大学で経営学の修士号をとり、ウォール街に事務所を設立。プロモーション・フィルムやTVCMのコーディネートを手がけた。もちろん、ショービジネス界で成功する足がかりにするためだ。

73年にロメロと知り合い、ローレル・グループを設立。TVのスポーツ・ドキュメンタリー・シリーズを制作する。ここで社会的信用と資金をたくわえ、76年の『マーティン』から映画界に進出したのである。

ニューヨークに本拠地をおき、ピッツバーグで制作する、という彼らの独自のやり方

は、ルービンスタインのアイディアだ。ニューヨークにいると、ヨーロッパとアメリカの両方がみられるから、とのことだが、なるほど、大ヒット作『ゾンビ』をイタリアとの協力でつくりあげた彼らしい話だ。

彼の映画に対する価値判断はシンプルでわかりやすい。つまり、〝観客はお金を払ってそれをみたがるかどうか〟ということだそうである。

音楽のジョン・ハリソン。彼は『死霊のえじき』で第一助監督もつとめた。エキストラ・ゾンビたちの演出という、やっかいな仕事を担当したのである。

ボストンのエマーソン大学で劇場芸術を学んだ後、ロメロと同じカーネギー・メロン大学で映画とTVを専攻。

73年のローレル・グループ創立のメンバーになり、以後『ナイトライダーズ』(81)に役者として出演したり、『クリープショー』(82)では音楽と助監督をつとめた。

また、監督もしている。ローレル・プロ制作のTVシリーズ『フロム・ザ・ダークサイド』の中の2編『百万ドルの賭』(脚本も)と『世紀の大魔術』がそれだ。劇場用映画で監督デビューも近いといわれている。

◀彼らの力が，ロメロをささえている！

▶ファインダーをのぞくゴーニック。

撮影を担当したマイケル・ゴーニックは、ロメロと彼の『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』に出あったことで人生が変わったという人物。『フロム・ザ・ダークサイド』シリーズの『ワードプロセッサー』ほか1編の監督もしている。
ピッツバーグ生まれのゴーニックはペンシルベニア州立大学で放送を専攻。その後、空軍に召集され、ロサンゼルスで戦争記録フィルムの編集をする。従軍後、大ファンだったロメロをたずね、そのときチャンスをつかみ、72年の『ザ・クレイジーズ』でエリック・パーカーと共同で音響効果を担当した。76年の『マーティン』で撮影の仕事をして以来、ロメロ作品のすべての撮影はみな彼の手によるものである。

ファンが憧れの人と仕事をするという、夢のようなことがほんとうになったのがゴーニックの場合だ。彼はいまや、ロメロを兄同様に思っている。

クレタス・アンダーソン。彼はロメロの母校でもあるカーネギー・メロン大学のデザイン科の主任教師だ。ロメロの映画にはプロダクション・デザイナーとして参加している。以前からTV番組は多く手がけていて、78年にはエミー賞（TV界のアカデミー賞）の候補にもなった。ロメロ作品は『ナイトライダーズ』『クリープショー』に続き、『死霊のえじき』が3作めにあたる。

夫人のバーバラ・アンダーソンは、『クリープショー』『死霊のえじき』で衣装を担当している。

そして最後はサラ・M・ハッサネイン。エグゼクティブ・プロデューサーである。『ナイトライダーズ』『クリープショー』『死霊のえじき』と3作続いてローレル・プロと組んできた。

ユナイテッド・アーチスツ・コミュニケーション・インク副社長ほか、10以上の肩書きをもつハッサネインは、今年65歳。劇場の案内係から今日の成功を築きあげた人物である。

〝特殊メイクの神様〟
トム・サビーニ

サビーニは特殊メイクのプロ中のプロだ。〝神さま〟とまで呼ばれている。そんな彼がアマチュアという言葉が好きだといえば、おかしいだろうか。サビーニによると、アマチュアの語源はラテン語の〝愛〟。アマチュアはプロ以上に仕事を愛することができるから、ということらしい。

じっさい、サビーニが仕事について話しだすととまらなくなる。じつに楽しそうなのだ。そして、それは、映画館に入りびたっていた少年時代の夢をそのまま実現することのできた数少ない幸福な人間のひとりだからだろう。

1947年、貧しいイタリア移民の子として生まれたサビーニは、近所の映画館に育ててもらったようなものだった。彼のおこづかいはすべて映画を見るために使われたという。

そんな12歳のある日、サビーニはジェームズ・キャグニーが往年の怪奇スター、ロン・チャニーに扮してその半生を演じた『千の顔を持つ男』(57)をみて強い感動を覚えた。その日から彼は鏡の前で自分の顔をあれこれいじって遊ぶようになったのだ。チャニーは俳優のほかに特殊メイクとスタントマンもこなした。サビーニ自身、小学生のころから芝居の勉強をはじめていた。幼いサビーニは舞台の上で別人になれること、変身の喜びにとりつかれていたらしい。

〝よし、ロン・チャニーのようになろう〟

サビーニはそう決心するまえに、しぜんにその道を歩きはじめていたのだ。

サビーニとロメロの初仕事が『マーティン』であることは有名だが、2人がはじめて出会ったときの話はそれほど知られていない。そのとき、サビーニはまだ高校生で、ロメロの自主制作映画の主役候補のひとりにのこったのだ。

だが、その映画『小鹿の泣き声』はけっきょく中止になってしまった。それから数年後、ロメロが『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』という映画を作ると聞いたサビーニは、とんでいってロメロに再会した。だが、サビーニはすでに軍隊に志願してしまった後だったので、映画のクランクイン直前に軍隊からの呼び出しを受け、ベトナムに行くことになった。兵隊ではなく、戦闘カメラマンとしてだった。

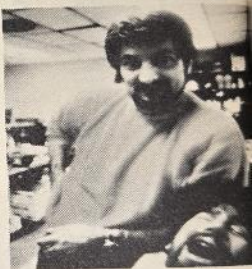
年間はノース・カロライナでカメラマン兼舞台俳優としてすごす。

76年、サビーニはピッツバーグにもどった。ロメロが『マーティン』という吸血鬼ホラーを撮るときいて、今度こそ主役に使ってもらおうと駆けつけたが、すでにキャストは決まっていた。そこでサビーニは、72年にボブ・クラーク監督の『溶ける顔』（日本ではTV放映）で特殊メイクをやり、続いてクラーク監督の親友、アラン・オームズビー監督の『デランジェッド』（74）でも同じように協力した経験があることをロメロにアピールし、ついに『マーティン』の特殊メイクをやることになった。

『マーティン』でサビーニは助演級だが、アーサー役で出演もした。そして大ヒット作の『ゾンビ』では、特殊メイク、暴走族のリーダー役、スタントマンの3役をこなして夢をかなえた。

以後の活躍は目をみはるばかりだ。ダスティ・ネルソン監督のサイコ・スリラー『エフェクツ』（79）、サビーニの名を一躍メジャーにおしあげた『13日の金曜日』（80）、自分でも気に入っている『マニアック』（80）。『マニアック』では、車の中で頭を吹きとばされるディスコ・ボーイも演じた。もちろんぶっとぶのはダミー（人形）。そして、ライフ

▼まるで少年のような表情のサビーニ。

▲スペシャルメイクの魔力を見よ！

ルの引き金をひく狂人（マニアック）にもサビーニが扮していたというから、ジョーダンがきつい。サビーニ自身、自殺したみたいで気分が悪くなったらしい。

それから『他人の眼』（81）、『バーニング』（81）、『ローズマリー』（81）、『ミッドナイト』（81）、『ナイトメア』（81。日本ではビデオ発売）と大活躍。その間に、ロメロのホラーでないバイク・アクション映画『ナイトライダーズ』に主演のひとり、モーガン役で出演。俳優トム・サビーニとしての作品であり、特殊メイクやスタントはひかえめにした。

82年にはロメロとともに『クリープショー』を手がける。清掃夫役で出演もした。この年には香港に渡り、『ティル・デ

ス・ドゥ・ウイ・スケアー』、『アローン・イン・ザ・ダーク』というホラーにも協力した。

83年は、ローレル・プロ制作のTVシリーズ『フロム・ザ・ダークサイド』の中の1編『インサイド・ザ・クローゼット』を監督、好評を得る。

そして『13日の金曜日・完結編』と、ナスターシャ・キンスキー主演の、まったくホラーとは関係ない作品『マリアの恋人』も手がけたのが84年だった。

85年、大作『死霊のえじき』に参加。ロケ地近くに建てられたスタッフ・ルームの中でも、とくに〝サビーニ・ランド〟と名づけられた部屋の中で、彼は6人の弟子とともにかつてないものすごい特殊メイクを作りあげたのだ。

『ファンゴリア　ビデオマガジンVo1・1／トム・サビーニ・スペシャル』というビデオは、彼の特殊メイクの舞台裏を見せていて、ファンにはたまらない楽しさだ。

仕事への愛情がすべて、と語るトム・サビーニ。やっぱり彼は〝特殊メイクの神さま〟である。

プロダクション・ノート

ゾンビとは、リビング・デッド、つまり生きている死者のことである。ウォーキング・デッドともいわれ、こちらは歩く死者。このほうは、ノロノロした彼らの歩みを思い出させて、多少はユーモラスな感じもする。

だが、彼らは得体の知れない化け物なのだ。彼らは人間の生肉や内臓だけを食べる。それも、栄養をとるための食糧としてでなく、ただ単に本能的に人間が食べたいのだ。

ゾンビの習性はまだある。人間の臭いを嗅（か）ぎつけて集まる、生前の習慣だった場所に集まるなど、本能だけの物体なのだ。

脳を破壊するか、肉体そのものを焼くなりして消してしまわないかぎり、ゾンビは殺せない。だが、彼らはウロウロ歩いている間にも、確実に腐っていくのだ。その腐敗が脳に達したとき、ゾンビの命はつきる。あとは朽ち果てていくだけだ。

ゾンビも、甦りたくて甦ったわけではない。地球に接近した彗星の大爆発により、放射された宇宙線の影響で、眠りを覚まされたのだ。だが、彼らには考える力がない。誰を呪（のろ）うこともできず、悲しむこともできない。そこにゾンビの哀れがあるのだ。

地下基地のシーンは、セットではない。いまは廃鉱となり、倉庫に使われているペンシルベニア州ワンパンの石灰石鉱山の巨大な洞窟でロケされた。広さは125エーカー。トンネルはずっと奥まで続いていて、行きどまりは氷のはった沼になっている。

ロケ隊を悩ましたのは、映画の中の登場人物と同じ問題だった。太陽が見たい、地上が恋しいのだ。朝は日の出前に地下にもぐり、夜になってやっと撮影が終わって外に出るという毎日に、スタッフもキャストもクタクタ。日曜日は確実に休みにするという約束がなかったら、たいへんなことになっていただろう、とスタッフが証言している。あやうく全員がゾンビになるところだった。

ゾンビになりかけた人たちはまだいる。それは、2番めのロケ地フロリダ州フォート・メイヤーズに住む人々だ。

ある日、ロメロたちのロケ隊がこの町にやってきて、人々は一時、立ちのかなければならなかったからだ。人々の目の前で美しかった町に何トンもの砂と枯れ葉がまかれた。店先は汚され、車は移動させられた。

ほんのすこしまえまでビジネスの中心地としてにぎやかだった自分たちの町を、一瞬のうちにゾンビのゴーストタウンに変えられてしまった人々は、風が吹くと撮影用

▲ゾンビにかかりきりになったスタッフたち。

の本物の100ドル札が舞うこのフォート・メイヤーズの町から、言葉もなく立ち去っていった。肩を落とし、ゲッソリとした表情とその足どりは、まるでゾンビそのものだったらしい。
もっとも、ロケが終われば町はもとどおり、すっかりきれいになって人々を安心させたことはたしかである。

大好きなゾンビに変身できて、映画にも出られる。トム・サビーニにメイクしてもらえるかもしれないし、ロメロに会えるかも!!
『死霊のえじき』のロケ現場はこんなファンたちでごったがえした。彼らは、誰にたのまれたのでもなく、自分たちから進んで

ゾンビ役のエキストラのために全米から集まってきたのである。ロメロは、なんの広告も出す必要はなかった。

エキストラの演出をうけもったのはジョン・ハリソン。この映画では音楽も担当している。だが、ロケ現場の指揮のたいへんさといったら、作曲とは比べものにならない。

とにかくみんなうれしさのあまり舞いあがって走りまわり、しまいにはカミつきあったりする始末なのだ。これらの興奮しきったクレイジー・ゾンビたちをおちつかせ、いうことをきかせる困難さは想像以上だった。

ハリソンは何度も叫んだ。

〝いいかい、忘れるな。君たちはもう死んでいるんだよ。百年ぐらいひどい関節炎だったように歩いてくれよ〟

しかし、ハリソンは、そのかわり多くのファンの熱意にふれられて感動的だった、という。

ゾンビといってもせいぜいセメント色のスプレーを顔にふきつけられるだけだし、だいいち、ほとんど写らないよ、といっても遠くから何度も足を運んでくるファンがたくさんいたからだ。その数は時に800人をこえ、ロメロたちを感激させた。

出演者たちはみな有名スターではない。舞台出身のものが多く、それだけに役への取り組み方はまじめだった。

だが、彼らを悩ませた共通の事柄があっ

た。とくにサラ役のロリー・カーディルとジョン役のテリー・アレキサンダーは役を掘り下げていくと、いつもその問題にぶつかったらしい。

サラとジョンは、いってみればこの映画の善の部分である。だが、ゾンビ対人間が40万対1という状況のなかで、ほんとうの善人は生きのびられただろうか。ゾンビとのおぞましい闘いをかいくぐってこられただろうか、という疑問がぬぐえなかったためである。

それでも彼らは自分の役柄に取り組み、自分なりの答えを出していった。カーディルはサラ役をこう語っている。

〃サラはとても強い女性。信じがたいほど強い意志と行動力をもった人間よ。もし柔軟性がすこしでもあったら、生きのこれなかったかもしれない〃

アレキサンダーはジョンのことをヒーローだと思っていない。

〃もしただの優等生のヒーローなら、ゾンビを大量にぶち殺して生きのびていけるわけがない。ジョンはこの映画の中でいろんな意味でもっともバランスのとれた人間だ。でも、やはりヒーローではないと思う。〃

こうした意味では、ゾンビのバブ役のハワード・シャーマンはじつに楽しく役づくりができたといえるだろう。彼は、バブが生きていたとき、どんな人間だったか、その過去を様々に作りあげることに熱中した。かなり細かいところまで考えたらし

▲ハワードは，毎日３時間もかかるメイクに耐えた。

い。もちろん、そのすべてが画面にあらわれたわけではなく、アイディアはよいが、いろいろな理由でカットされた部分も多かった。だが、シャーマンによって、ただの飼育用ゾンビが、愛すべきキャラクターをもったバブへと変わっていったことだけはたしかである。そして、シャーマンが撮影中ずっと、スタッフからもキャストからも人気者だったことも事実だ。

それにしても彼は毎日毎日、３時間かかるメイクアップに耐えぬかねばならなかった。ゴムでできたマスク（空気が通る穴はあいている）を顔全体にぬり、生々しいシワを作りあげるのに、時間がかかるのだ。

彼は人ごとのように後に語っている。

〝あのメイクアップに問題があるとすれ

ば、そうだな、毎日とってはずさなきゃならないことだね〃

ロケ現場の近くに建てられたスタッフ・ルームの中で、入り口に〝サビーニ・ランド〃と書かれた部屋ほどみんなが注目した場所はなかっただろう。

この部屋の主、サビーニと彼の6人の弟子によって、じつに様々な特殊メイクが作られていった。彼らはゾンビが登場するシーンがあるとき、毎日20体、アップにたえられる凝った仕掛けのゾンビを作らなければならなかったのだ。それぞれにかかる時間は1時間半。まさに戦争だった。

サビーニがもっとも苦労したのは、ローズ大尉のバラバラ・シーンだった。大尉役のジョゼフ・ピレートーは、まえから役者としての自分を伸ばしてくれる役を望んでいたが、まさかゾンビに体を伸ばされてしまうとは……思ってもみなかった。

音楽のジョン・ハリソンは、おもな撮影が終了した85年のはじめから曲作りにとりかかり、完成までに8週間を要した。死の町に漂う空気のような音楽、ゾンビが支配する死の町のムード作りがもっとも重要なテーマだった。そして結果は——大成功。映像と音楽は、ひとつの映画のそれぞれの表現方法であるという彼の考えどおり、じつに立体的なスコアができあがった。

ホラームービーに大スターはいらない

乱暴ないい方かもしれないが、ロメロの映画に有名スターはいらない。

なぜなら、彼の映画はいままでもほとんどの場合、登場人物の一人一人があるタイプの人間の象徴のような描かれ方をしているからである。

『死霊のえじき』の場合でいえば、女性科学者は女性と知的人格のもち主の象徴であり、その他、好戦的でわがままな権力者、信心深い者、くるったがんこ者、命令に服従したがる者など、それぞれの個性がオーバーに、カリカチュア化して描かれている。

役柄がパターン化しているということは普通はマイナスであるが、ロメロの作品では成功している。観客は登場人物の誰にも感情移入できず、最初はとまどうかもしれない。だがやがて、それがリアルな、ドキュメンタリーのような効果をあげていることがわかってくる。

そしてこの『死霊のえじき』のロメロのにくいところは、人間ではなく、なんとゾンビのバブにも人格を与え、ユニークなキャラクターをつくりあげていることだ。そしてまた、その役柄を自分なりにつくりあげた俳優たちの実力も、相当なものである。

女性科学者サラに扮したロリー・カーディルはこれが映画デビューというラッキー・ガール。知的でクール、『エイリアン』のシガニー・ウィーバーが演じた新しいヒロイン像のイメージに近い感じだ。TVシリーズの『エッジ・オブ・ナイフ』『ライアンズ・ホープ』やブロードウェーの舞台に立っていた。

彼女の父ビルは、芸名チリー・ビリー。ピッツバーグの人気TV司会者だ。彼は17年前、『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』に出演していた。また、カーディルはカーネギー・メロン大学の出身で、ロメロとは以前からの知り合いだった。彼女がロメロと違うところは、小さいころすごいコワがりだったことだ。

◀演技指導に耳を傾けるロリー・カーディル。

▶ロメロ映画ではつねに黒人がヒーローに。

ロメロ映画の特色は、黒人俳優の起用である。

ヘリコプター・パイロットのジョンを演じたテリー・アレキサンダーはこの作品が映画デビューの38歳。デトロイトに生まれ、なんと6歳で役者になろうと決心し、大学で演技コースをとった。

ニューヨークの舞台やTVシリーズ『フェーム／青春の旅立ち』『ミスター・ベンソン』などに出演。舞台の代表作は、1年間続演した『ストリーマーズ』である。敵役（かたきやく）のローズ大尉に扮したのはジョセフ・ピレートー。『ゾンビ』『ナイトライダーズ』にも出演している。

ピッツバーグ生まれで、現在もここを中心に活躍している。父も芸人で、ボストン

の大学で演劇を学び、ポーランドの劇団で修業したという経歴をもつ変わり種。また、78年には映画『ディア・ハンター』の制作スタッフをしているなど、行動的だ。

この映画のためにベトナム戦争についての本をたくさん読んだ。ベトナムでのジャングルの戦いはこの映画の戦闘シーンと同じような恐怖だっただろう、と考えたからだという。

くるえる老科学者ローガンを演じたリチャード・リバティーはキャリア30年のベテラン。72年の『ザ・クレイジーズ』でアーティ役を演じたのは12年前。ロメロともう一度仕事ができて大喜びしたらしい。

ニューヨークで俳優をした後、マイアミでプロダクションを設立。いまはフロリダのTV、舞台での仕事が多い。

単純な役はきらいなようで、ローガンのような異常なキャラクターには熱心にとりくむあまり、自分の性格まで変わってしまう、と語っていた。

ゾンビ界のアイドル、バブを演じたハワード・シャーマンの、オーディション秘話――彼は突然、七面鳥の足をとりだすと、キャスティング・ディレクターのゲーラン・ロスの前でみごとな食べっぷりを披露したのだ。

彼のアイディアでバブのキャラクターはだんだんにふくらんでいった。ウォークマンも彼の発案だ。そしてついには、脚本の一部でロメロに協力するまでになった。

シカゴ生まれ、現在30代半ば。各地の劇

場の舞台に立ち、84年には映画『グレース・クイッグレーの最後の回答』でキャサリン・ヘップバーンの義理の息子に扮した。妻のニキは詩人で短編小説家である。
酒好きの無線技師マックダーモットに扮したジャラス・コンロイはアイルランド生まれ。ロンドンで演技を学び、数多くの舞台に出演。その後、ニューヨークに移り、ブロードウェー・オリジナルの『エレファント・マン』などに出演。映画は『天国の門』(80)や『エレファント・マン』(80)などがある。
スペイン系の青年ミゲル役のアントン・ディレオ・ジュニアは、舞台出身。ミュージカルもこなし、『ウェスト・サイド物語』や『南太平洋』の舞台に立っている。

ロメロ作品は『ナイトライダーズ』『クリープショー』に続いて、これが3作め。
ジョン・アムプラスの名を聞いてすぐにわかる人はかなりのロメロ・ファンだ。『マーティン』の主人公を演じていた。その後、『ゾンビ』『ナイトライダーズ』『クリープショー』にも出演。俳優というよりスタッフの一員のような感じだ。生まれも育ちもピッツバーグ、この映画では科学者のテッド・フィッシャーを演じた。
荒くれ下士官スティールを演じたゲリー・ハワード・クラーは、コネチカット州ブリッジポート生まれ。舞台、映画、TVとなんでもこなす。映画は『グロリア』(80)『大逆転』(83)『コーラスライン』(85)など。

作品紹介

1986年に日本で公開されたローレル・プロダクション映画〝DAY OF THE DEAD〟(邦題『死霊のえじき』脚本・監督/ジョージ・A・ロメロ)を小説化したものです。

ローレル・プロダクション映画作品

死霊のえじき

岡山　徹/文

定価340円

昭和61年4月23日　第1刷発行

発行者——野間惟道
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

写真協力—東北新社
東映クラシックフィルム
デザイン—シルバーストーン
協力——イーグルス・カンパニー
本文印刷—豊国印刷株式会社
カバー印刷—双美印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

ISBN4-06-190053-6 (0)　(三企)